

距離規制の妥当性について検証するための事例

ここでは、過去に枯渇化現象が生じた3つの温泉地を取り上げ、どのような源泉間の距離でなら枯渇化現象が生じないかを探ることとする。

なお、ここで考える源泉分布域とは、温泉を集水する地域としての性格を考慮していることから、主要な源泉を真円で包含させることができる面積として考えた。また、源泉の温泉湧出能力は地域毎、源泉毎で変化に富むことから、その温泉地内にある源泉数から適正な源泉距離を考察するのではなく、その温泉地からどれほどの温泉を採取していたのかを検証し、これを1源泉当たり湧出量の全国平均である100L/分で除すことでその地域内の源泉数に換算。その数値から1源泉が必要とする面積を算出し、また、その数値から源泉間距離を逆算した。

その検討結果を以下に示す。

(1) A温泉

枯渇化現象の状況	<p>A温泉は、当初は自噴利用が中心であったのが、昭和31年以降、動力揚湯が行われ始め、昭和33年2月には自噴利用から揚湯利用への変更を迫認し、昭和36年10月の審議内規の改正では動力揚湯を正式に認めるに至った。これに伴い、湧出量が増加し、枯渇化現象が出現し始めた。具体的な状況は以下の通りである。</p> <p>昭和29年当時のA温泉は利用源泉数が63で、自然水位は0～-1.0m、揚湯水位は-0.10～-3.0m、1井当りの平均湧出量は14.91L/分、全湧出量は約940L/分（日量1353m³）であって、自然湧出量の範囲内で需要に答えてきた。</p> <p>ところが、昭和33年4月の役場の調査によると、総湧出量（1556m³/日）は昭和31（1956）年4月以降、18%の増加を示した。</p> <p>昭和34年には利用源泉数が68と微増し、総湧出量は昭和29年時の940L/分から1,345L/分へと43%増加した。</p> <p>さらに昭和39年の調査時に、利用源泉数が63に減ったものの、総湧出量は1,424L/分（51.5%増加）に増加している。その結果、揚湯水位は-0.1～-3.0mから-4.7～-9.02mへと低下し、周辺あるいは上部から地下水の浸入を招来し、孔底温度と泉温の低下、溶存成分量の減少となって現れてきた。</p> <p>以上のような経緯から、A温泉が洪積層の温泉層（第2次温泉源）から採湯している限り、昭和29年時の湧出量（約940L/分）にもどらなければ、過剰揚湯といわざるを得ない状況であることが指摘された。</p>
現在の状況	<p>平成17年当時のA温泉の利用源泉数は44に減り、総湧出量は1,100L/分台に減じ、平均温度泉温は37.3℃から40.5℃へと回復している。温泉水位は昭和39年当時より若干低下している傾向があるものの、目立った低下ではな</p>

	く、昭和 39 年当時よりも健全化（回復）しているといえる。しかし、昭和 29 年時に比較すれば、平均 <u>温度泉温</u> は未だ低く、温泉水位も最大 10m 近く低下しているの、A 温泉の適正湧出量は昭和 29 年時の 940L/分程度として、大きな間違いはないものと思われる。
源泉分布面積	1.400km ²
源泉密度と源泉間距離	A 温泉における昭和 29 年当時の温泉湧出量 100L/分当たりの面積は 0.149km ² となり、その状態での <u>源泉間距離は 413m</u> となる（表 1 参照）。

(2) B 温泉

枯渇現象の状況	B 温泉は、大正末期頃までは自然湧出あるいは掘削自噴の状態が続いていた。戦後の高度成長期に入ると、多数の人が競うように新規の掘削を行い、揚湯を行うようになった。昭和 52 年当時で合計 137 もの源泉が所在した。その結果、温泉水位は急激に低下し、昭和 26 年当時には地表面下 20m 位であったものが、35 年頃には 100m（利用源泉数は 65、総湧出量は約 2,600L/分）になり、50 年頃には 200m（利用源泉数は 95、総湧出量は約 3,300L/分）にまで低下した。これにより、昭和 35 年には 1 井当たり 7.94 馬力で足りていた動力が、昭和 50 年には 15.78 馬力もの動力が必要となり、1 馬力当たりで揚湯できる量は逆に減少する事態となった。なお、昭和 38 年以降、平均温度の低下はほとんどない（おおむね 58℃程度）。
現在の状況	昭和 53 年から集中管理による給湯が行われている。これにより、稼働源泉数は 55→53 に減じ、総湧出量も約 2500L/分程度まで減少させた。その結果、昭和 56 年には温泉水位は地表面下 140m 台にまで回復している。
源泉分布面積	4.400km ²
源泉密度と源泉間距離	昭和 53 年の集中管理以後の湧出量 100L/分当たりの面積は 0.176km ² で、その状態での <u>源泉間距離は 449m</u> となる（表 1 参照）。

(3) C 温泉

枯渇現象の状況	<p>C 温泉は、明治 31 年の記録では源泉数は 20、昭和 10 年代までは自然湧出泉や掘削自噴泉が存在し、昭和 21 年までは自然湧出泉と小規模揚湯泉とが共存した。しかし、昭和 22 年以降乱掘・増掘競争が始まり、昭和 25 年には自噴泉が姿を消した。</p> <p>これまでの温泉湧出量や温度、温泉水位の変化状況は以下の<u>とおり通り</u>である。</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>年</th> <th>源泉数</th> <th>平均温度</th> <th>温泉採取量</th> <th>温泉水位（標高）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>昭和 15 年</td> <td>16</td> <td>66.0℃</td> <td>約 540L/分</td> <td>約 90m</td> </tr> <tr> <td>昭和 30 年</td> <td>30</td> <td>60.9℃</td> <td>約 1,280L/分</td> <td>約 70m</td> </tr> <tr> <td>昭和 35 年</td> <td>45</td> <td>58.2℃</td> <td>約 2,260L/分</td> <td>約 30m</td> </tr> <tr> <td>昭和 44 年</td> <td>58</td> <td>53.7℃</td> <td>約 2,000L/分</td> <td>約 14m</td> </tr> </tbody> </table>					年	源泉数	平均温度	温泉採取量	温泉水位（標高）	昭和 15 年	16	66.0℃	約 540L/分	約 90m	昭和 30 年	30	60.9℃	約 1,280L/分	約 70m	昭和 35 年	45	58.2℃	約 2,260L/分	約 30m	昭和 44 年	58	53.7℃	約 2,000L/分	約 14m
年	源泉数	平均温度	温泉採取量	温泉水位（標高）																										
昭和 15 年	16	66.0℃	約 540L/分	約 90m																										
昭和 30 年	30	60.9℃	約 1,280L/分	約 70m																										
昭和 35 年	45	58.2℃	約 2,260L/分	約 30m																										
昭和 44 年	58	53.7℃	約 2,000L/分	約 14m																										

	昭和 50 年	54	54.0℃	約 1,700L/分	約 18m
現在の状況	昭和 56 年から集中管理による給湯が行われ、それまでと比較して総湧出量は約 1,800L/分でありあまり変わらないものの、稼働源泉数は 34 に減じた。その結果、昭和 57 年には温度は 60.8℃に、温泉水位は海拔 80m 程度に回復した。稼働源泉数の減少にはその後も努力し、平成年代に入ると 22~24 井となっている。この間の総湧出量は 1,700~1,900L/分の範囲で推移し、温泉水位も海拔 70m 程度で安定している。				
源泉分布面積	2.030km ²				
枯渇現象発生時の源泉の密度	枯渇化の進行を止めることができた集中管理以後の湧出量 100L/分当たりの面積は 0.119km ² で、その状態での源泉間距離は 369m となる (表 1 参照)。				

以上のとおり、現状 (資源保護のための対策実施後) 又は枯渇化現象発生前の温泉採取量から、1 源泉当たりの所要面積を計算すると 0.119~0.176 k m²となる。これが温泉資源の枯渇化現象を抑えるために必要な源泉密度となり、この密度の源泉を均等に配置するために必要な源泉間の距離は 369~449m となる。

(参考)

最も高い密度で源泉を配置した場合の 1 源泉あたりの所要面積

($0.866 \alpha^2 \text{ k m}^2$ ($=\sqrt{3}/2 \alpha^2 \text{ k m}^2$)) の考え方

距離規制の距離を $\alpha \text{ km}$ とした場合、最も高い密度で源泉を配置する方法は、一辺 $\alpha \text{ km}$ の正三角形の各頂点に源泉がある形である。それら正三角形の集合体からなる平面を源泉を中心とする四角形でモザイク状に剥ぎ取ると仮定すると、四角形は (α) と ($\sqrt{3}/2 \alpha$) を 2 辺とする長方形となる。ただし、長方形を用いたのは、区域内の空間を隙間なく均等に見積もるためであり、水文学的な考えを反映したものではない。

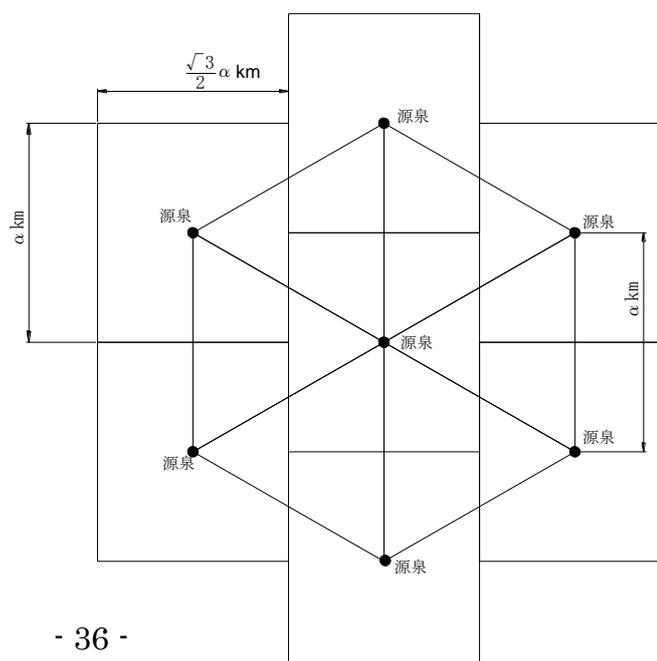


表 1 源泉分布面積と 100L/分当たり所要面積、源泉間距離

	A 温泉	B 温泉	C 温泉
①源泉分布面積 (km ²)	1.400	4.400	2.030
②合計温泉湧出量 (L/分)	940	2500	1700
③1 源泉 (100L/分) 当たりの所要面積 (km ²)	0.149	0.176	0.119
④上記に必要な源泉間距離 (=1.07√③, m)	413	449	369

距離規制の距離を α k mとした場合、最も高い密度で源泉を配置する方法は、一辺 α k mの正三角形の各頂点に源泉がある形である。その場合の1 源泉当たりの面積は、 $0.866\alpha^2$ k m² ($=\sqrt{3}/2 \alpha^2$ k m²) となる。逆に、1 源泉当たりの面積として β k m² を確保するためには、各源泉の間に $1.07\sqrt{\beta}$ k m以上の距離を取れば十分となる。

熱収支について

熱収支の考えは、温泉を採取することで地下から奪われる熱量と、地球内部からの熱伝導で獲得できる熱量とを比較し、両者が釣り合うことで熱量的な均衡を取ることができる面積を検討したものである。

計算条件として、温泉の温度は 45℃、当該地域の気温は 15℃とし、1 源泉当たりの湧出量の全国平均である 100L/分 (≒100,000g/min) を採取したとすると、地下から採取する熱量 (Q_s とする) は以下の通りとなる。

$$Q_s = ((45 [^{\circ}\text{C}] - 15 [^{\circ}\text{C}]) \times 100000 [\text{g}/\text{min}]) / 60$$

$$= 50,000 \text{cal}/\text{sec}$$

一方、地球内部から熱伝導によって運ばれる熱量は、地殻熱流量^(※) と呼ばれる。日本における地殻熱流量は様々な文献等で公表・紹介されているが、ここでは地質調査所 (1980) による「日本温泉放熱量分布図」にコンターマップとして表現されているので、参照とされたい。

※地殻熱流量 (Q : cal/cm²·sec) とは、地球内部から地表に向かう熱の流れの量を意味する。地表付近ではほとんどの熱伝導で運ばれていると考えられるので、ある場所で地温勾配 (dT/dZ、T : 温度、Z : 深さ) と熱伝導率 K を測定することで、熱流量は次式により求められる。

$$Q = K \cdot (dT/dZ)$$

(新版地学事典 : 1996 による)

なお、1cal は常用的には 1g (≒1mL) の水の温度を 1℃上げるのに必要な熱量を指す。

これによると、我が国の非火山地域における地殻熱流量は 0.5~1.5HFU (1 HFU は 1 × 10⁻⁶cal/cm²·sec) の範囲にある。仮に、上記の温泉採取地点の地殻熱流量が 1.0HFU の地域であるとする、そこで獲得できる熱量 (Q_e とする) は 1 × 10⁻⁶cal/cm²·sec であり、1km² 当たり換算すると 10,000cal/km²·sec となる。したがって、上記の温泉採取によって奪われる熱量 (Q_s) を、熱伝導によって運ばれる熱量 (Q_e) で補填するには、Q_s/Q_e=5km² の面積が必要となる。これは半径 1.26km の円に相当する。

同様の計算を、いくつかの HFU 値に対応して試算した結果を表 1 に示しておく。

表 1 熱収支による集水必要面積試算例

地殻熱流量	HFU	0.5	1	1.5	2
同上 (単位換算)	cal/cm ² ・sec	0.000005	0.00001	0.000015	0.00002
同上 (1km ² あたり)	cal/km ² ・sec	5,000	10,000	15,000	20,000
必要面積	km ²	10	5	3.33	2.50
半径	km	1.78	1.26	1.03	0.89

注:温泉の温度は45℃、当該地域の気温は15℃とし、湧出量は100L/分(=100,000g/min)としたので、温泉の熱量は50,000cal/secとなる。

経年的な水位低下について

以下の報告から、箱根カルデラと湯河原カルデラでは、1950年代後半から70年代にかけて著しい水位・温度・成分の低下が生じていたと考えられる。大山(1984^{(*)1}、1985^{(*)2})は、両カルデラにおける水がそれぞれ閉じた循環系を形成しているとみなし、当時の温泉総採取量と降水量の比を、箱根で2.3%、湯河原で5.5%と見積もっている。同報告によれば、カルデラへの平均降水量は箱根で2,830mm(108km²)、湯河原で2,200mm(30km²)である。一方、1979年度の温泉総湧出量は箱根で約27,000L/分、湯河原で約7,000L/分(いずれも神奈川県統計資料による)であり、温泉湧出量が降水量に占める割合は、箱根で4.6%、湯河原で5.5%となる。

*1: 大山正雄・広田 茂・迫 茂樹・粟屋 徹、1984: 湯河原の水位(1982年)、神奈川県温泉地学研究所報告、第15巻、第5号、183-191

*2: 大山正雄・平野富雄・大木靖衛、1985: 箱根の地下水とその利用、神奈川県衛生部

1. 湯河原温泉

- ① 大山・大木(1974) 湯河原温泉の水位の変遷、神奈川県温泉研究所報告、第6巻、第1号、31-46.

湯河原温泉の沿革を整理するとともに、1900年代初頭から1970年代までの、源泉総数、総湧出量の推移と、静水位の低下についてまとめている。湯河原温泉の開発が顕著だったのは1935~40年頃と、1950年以降の2時期であった。1935年頃の開発により、それまで自噴していた掘抜井戸が動力揚湯への切替えを余儀なくされる事態が発生したが、特に急激な水位低下が始まったのは1950年以降であり、総湧出量は1958年の5,400L/分(利用源泉数67)から、1978年の7,000L/分(利用源泉数103)まで増加している。これに伴う温泉井の水位低下は、1960年までは、温泉の揚湯が集中している地域を中心に水位低下が顕著であったが、その後も続いた温泉の掘削・利用の増加により、水位の低下範囲は湯河原温泉全体に拡大していった。1957年と1972年とで比較すると、水位低下の最大量は中心部で70m以上、周辺部でも40m程度であった。以上の結果から、湯河原温泉の総湧出量は、著しい水位低下が起きる前の毎分4,500~5,000L/分程度が適当であるとしている。

- ② 平野・粟屋・大山・大木(1976) 湯河原温泉の地下水位低下と温泉の冷地下水化 — こそめ橋周辺の古い源泉の場合 —、神奈川県温泉研究所報告、第7巻、第2号、53-68.

湯河原温泉の中心部(こそめ橋周辺)で古くから利用されている源泉について、井戸の深さ、温泉温度と湧出量、化学組成の推移や揚湯装置の変遷について検討

した。各源泉とも、水位の低下にともない、揚湯装置の設置、**増掘増く↔**、揚湯能力の強化といった経過をたどることで源泉の維持に努めてきているが、1960年以降は、水位・温度の低下だけでなく、溶存成分の減少、成分比率(Cl/SO₄比)の変化が観測されるなど、温泉の冷地下水化(浅層地下水の混入割合増加)が進行していることが明らかになった。

2. 箱根温泉

③大山・伊東・大木(1985) 箱根温泉の温度と湧出量の観測 昭和 57-58 年、神奈川県温泉地学研究所報告、第 16 巻、第 5 号、41-52.

箱根を代表する湯本・塔ノ沢、蛇骨、姥子、芦ノ湯の各温泉地で、温度・湧出量の連続観測を行った結果について検討した。このうち、湯本・塔ノ沢地域では、地域の総温泉湧出量の約 8%を湧出する竪穴湧泉において、1958 年から 1970 年にかけて泉温の低下が著しかった。また、蛇骨湧泉では、箱根の火山活動活発化の影響による温度上昇が観測されたものの、1968 年以降、湧出量の減少傾向が続いていた。

④大山・久保寺・小鷹・伊東・迫(1985) 箱根火山中央火口丘東麓の温泉水位、神奈川県温泉地学研究所報告、第 16 巻、第 5 号、53-62.

箱根中央地区で 1978(昭和 53)年から行っている観測井の水位観測結果と、過去の水位の記録のある温泉井のデータについて検討し、1960 年から 1980 年にかけての温泉水位の低下速度を、箱根中央部で 0.3~0.5m/年、山麓周辺で 0.8~1.0 m/年、基盤岩中で 0.7~0.8m/年と見積もった。

⑤平野・広田・小鷹・栗屋・大木(1976) 箱根塔ノ沢温泉の温度と化学成分、神奈川県温泉研究所報告、第 7 巻、第 2 号、85-92.

⑥平野・広田・大木(1977) 箱根湯本、下茶屋地区の温泉の湧出量と溶存成分の減少について、神奈川県温泉研究所報告、第 8 巻、第 2 号、51-66.

湯本・塔ノ沢温泉では、温泉総湧出量が、1953 年の毎分 2,810L から、1983 年には、その 2 倍以上にあたる 6,023L/分に増加したのにもない、自然湧泉の枯渇、温泉の水位、温度、湧出量、溶存成分の低下が進行していることを報告している。

温泉採取制限事例

本地域では、掘削当初は大量に自噴する温泉が多くあった。しかし、源泉数及びそれに伴う温泉採取量の増加と共に水位(圧力)が低下し動力揚湯泉が多くなり、資源が急速に衰退していった。そのため、行政により資源動向調査と、モニタリングが行われ、現在は地域の温泉採取量を制限することで水位低下傾向を抑えることに成功している。なお、資源動向調査とモニタリングについては現在も実施されている。

1. 温泉資源動向

本地域の地下構造は平野が1つの大きな構造的な堆積盆を形成しており、層状に貯留された温泉である。浴用以外にもハウス暖房等の農業利用も行われている。

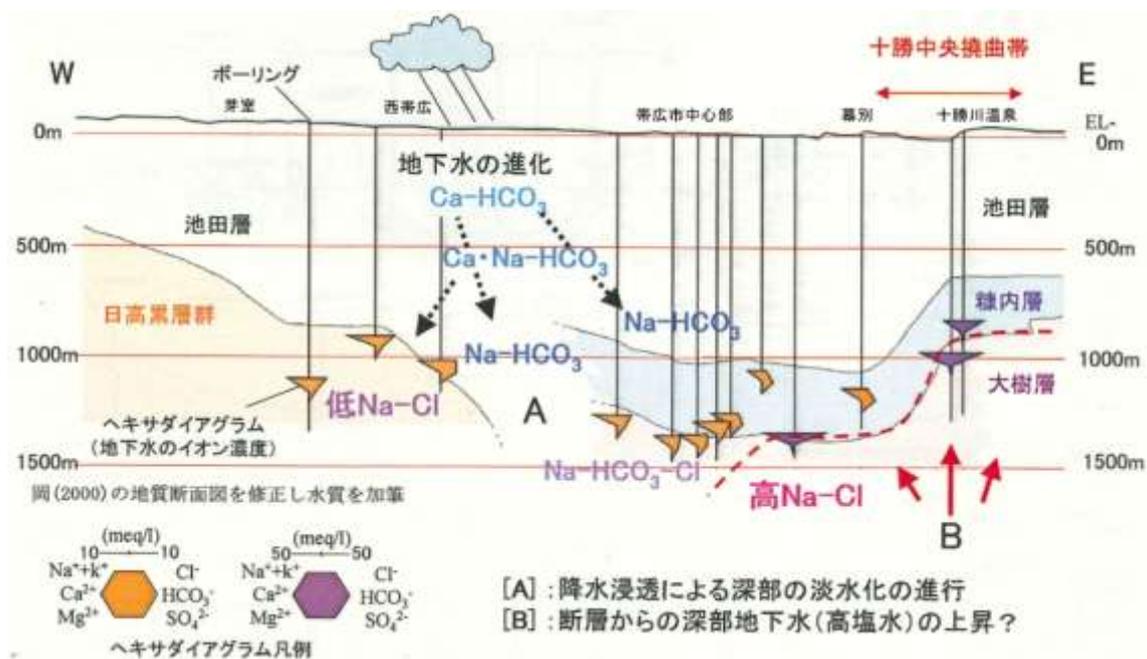


図1 十勝平野の温泉賦存状況（宮川・馬原，2005）

帯広市周辺では1960年～1973年にかけて、深度300～600m級のボーリングによる温泉開発が始まった。1974年と1976年には掘削深度850mと935mの掘削が行われ、湧出量600～800L/分、**泉温40℃弱の温度で**自噴が確認された。これが帯広市付近での本格的な温泉開発の先駆けである。その後は開発ラッシュとな

り、1984年には掘削深度が1617mに達した。温泉の開発は1981年までの開発開始時期、1982～1986年の開発ラッシュ時期、1987～2004年の温泉保護時期、2005年以降の採取制限時期に区分される。1994年時における源泉総数は帯広市内で31源泉、周辺地域で32源泉となっている。温泉開発は1982年～1986年の5年間に集中している（図2参照）。

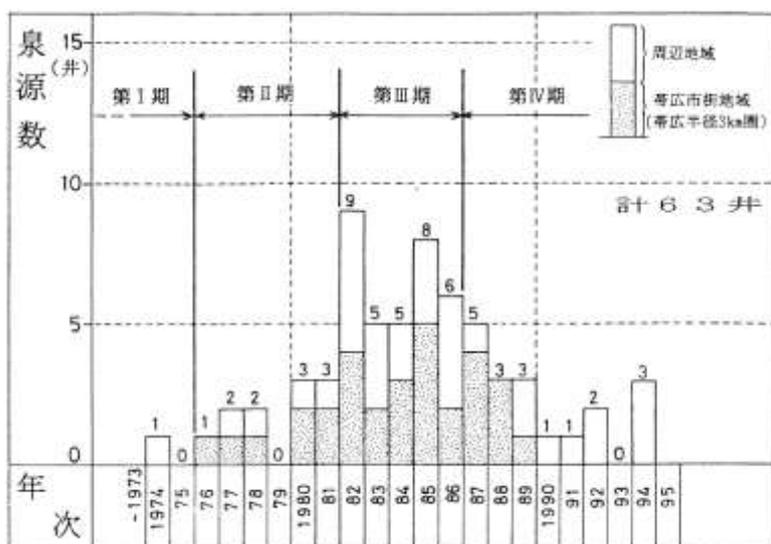


図2 掘削深度800m以上の源泉数の推移

水位変動に関しては長期に渡る詳細な水位モニタリングデータが存在し、温泉地総採取量と水位の関係は図3に示される。

帯広市内地域の総湧出量は、1982年に4056L/分であった。その後は増加し、1984年には9156L/分のピークに達したが、それ以降は、動力泉数が増えるとともに湧出量は減少傾向となる。1992年以降はほぼ6000L/分前後で横ばい状態となっている。現在では自噴源泉数とその湧出量は少なくなりほとんどの源泉が動力による揚湯を行っている。

自然水位分布は、1980年代に著しい低下を示している。各観測源泉では、1987年以後の保護地域設定が行われるまでにおおよそ20m以上にも及ぶ著しい低下が認められる。その後の1990年代に入ってから、保護地域・準保護地域指定により一時的に水位の低下傾向が緩やかとなるも1990年代後半からは保護地域（帯広市）周辺地域での掘削が増加したため再び低下傾向を示すこととなる。近年は、準保護地域の拡大とともに、保護地域は1源泉あたりの揚湯量を最大150L/分、準保護地域は300L/分に制限したことによる効果で徐々に低下速度が緩やかとなっている。

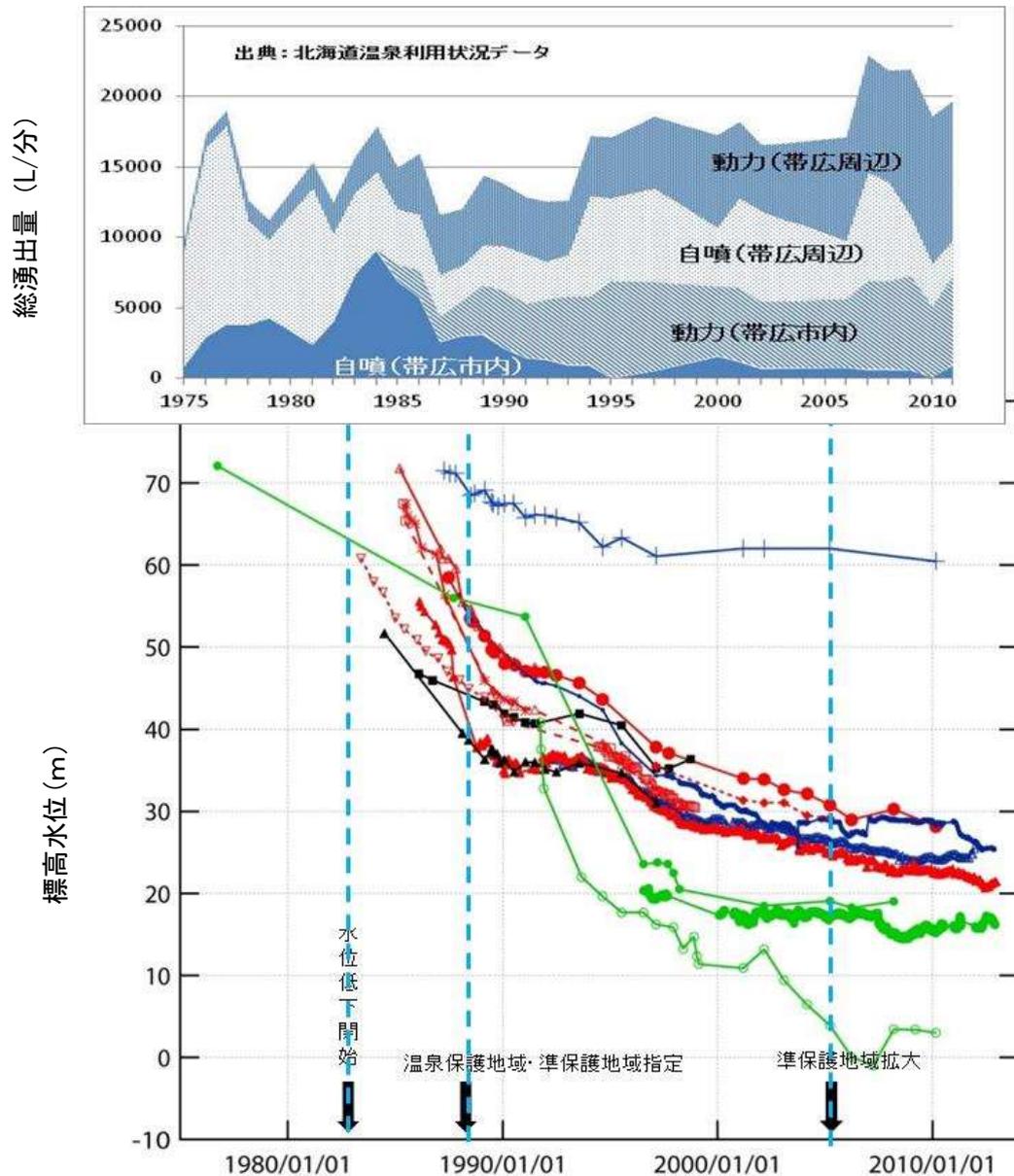


図3 帯広市及び周辺地域の温泉水位と総採取量の経年変化

2. 当地域における温泉賦存状況とこれまでの行政対応

温泉の量的評価を行う場合、温泉胚胎層に流入する量と流出する量のバランスを考える必要がある。バランスが崩れると地下水位の変動となって現れ、各源泉間の相互干渉などを発生させる原因となる。

道は、1985年以降地域の温泉資源が衰退を示したことから、源泉群全体が互いに影響しあう相互干渉状態を示すものと判断した。1986年12月より帯広市街地域について、温泉保護対策を実施し、引き続き監視を強めるとともに水位観

測等のモニタリングを開始した。1988年12月からは帯広市街地域を保護地域（原則として、新規掘削を禁止等）、隣接する西帯広地域については、準保護地域の措置（制限距離500m内は原則として新規掘削を禁止等）がとられている。

その結果、水位については帯広市街では、1983、1984年に年間5mの低下を記録した後は、徐々に緩やかな低下傾向となり1988年には同2m、1991～1994年には同0.5m程度でほぼ横ばい状態となり、保護対策の効果が現れている。

ただし、現在でも水位低下は続いており、安定した状態には見えない。したがって、当地域の温泉採取量は賦存量よりも上回っていると考えられる。

昭和 51 年 十勝川温泉温泉保護地域指定

昭和 63 年 帯広市中心部保護地域
西帯広準保護地域指定

平成 17 年 音更町、幕別町準保護地域指定



図4 保護地域の設定区域

3. 引用文献

北海道立地下資源調査所（1995）地質資源調査所ニュース 北海道立地下資源調査所広報誌，vol. 11，No4.

宮川公雄・馬原保典（2005）：地下水流動における断層破碎帯影響評価手法—地下水化学的調査の適用と系統的評価手段の提案—。電力中央研究所報告，No4039，26p.

|

表1 帯広市を中心とした温泉開発の変遷と資源動向及び行政対応

年代	開発動向	資源状況	資源動向モニタリングの取り組み	行政の取り組み
～1975年	1970年頃から1000m位浅の開発が行われる。	～40℃の温泉が大量自噴（毎分数千リットル規模）	開発当初から現在まで、地質研究所（地下資源調査所）は資源状況のモニタリングを様々な形で継続	
1976～1981年	帯広市内で本格的な温泉開発が始まり、計11源泉が掘削される。	開発深度1000m前後で40～48℃の温泉が大量自噴（毎分数千リットル規模）		1980年頃から地元自治体等で深層熱水への関心が高まり、調査掘削等が行われる。
1982～1986年	帯広市内及び周辺地域での開発ラッシュ。計33源泉の掘削が行われる。	開発深度は最深1600mに達するようになり、掘削当初は大量に自噴する。最高温度は58℃を示した。その後、自噴量は徐々に減少し、既存源泉は徐々に水位低下した。	1986年5月、1源泉で水位のモニタリングを開始	1982年頃から帯広市内での水位低下・資源枯渇問題について道衛生部・温泉審議会での検討を開始。1986年12月より、市内中心部半径3km圏について準保護地域に指定する。
1987～2003年	1988年の保護対策施行後は開発地域が保護地域・準保護地域に隣接する場所で活発に開発が行われるようになった。1996年までに11源泉の開発が行われた。	自噴源泉の自噴量は減少し動力揚湯への切り替え、水位低下が継続する。保護対策施行後、一時的に水位低下の鈍化傾向が現れたが1996年頃から再び水位低下率が大きくなる。	1987年10月、1源泉で水位測定開始。1987年12月衛生部、温泉保護対策調査開始（業務課・帯広保健所、地下資源調査所共同）、1988年10月以後、市で2源泉水位測定開始、以降2源泉でも水位の測定が始まる。1992年6月には地下資源調査所、1源泉で水位測定を開始する。	1987年7月、市の温泉保護対策懇話会発足、1988年12月より市中心部を保護地域指定、隣接する西地域について準保護地域指定が行われる。
2004年～	2004年以降は、準保護地域で若干掘削されているが、源泉総数はほとんど増加していない。	化石燃料価格の高騰等により、温泉熱利用が積極的に行われている地区もあり、汲み上げ量は減っていないようである。	現在のモニタリング体制、道保健福祉部が中心となり、毎年1～2回、湧出量、泉温、水位等の現地調査を実施している。連続モニタリングに関しては、温泉水位観測4箇所、泉温は3箇所、他地下水井3箇所で水位観測も行われている。	2005年5月より準保護地域が拡大、保護地域は1源泉当たりの揚湯量を最大150L/分以内、準保護地域は300L/分以内に制限する。

表1 帯広市を中心とした温泉開発の変遷と資源動向及び行政対応

年代	開発動向	資源状況	資源動向モニタリングの取り組み	行政の取り組み
～1975年	1970年頃から1000m位浅の開発が行われる。	～40℃の温泉が大量自噴（毎分数千リットル規模）	開発当初から現在まで、地下資源調査所（現地質研究所）は、資源状況のモニタリングを様々な形で継続	
1976～1981年	帯広市内で本格的な温泉開発が始まり、計11源泉が掘削される。	開発深度1000m前後で40～48℃の温泉が大量自噴（毎分数千リットル規模）		1980年頃から地元自治体等で深層熱水への関心が高まり、調査掘削等が行われる。
1982～1986年	帯広市内及び周辺地域での開発ラッシュ。計33源泉の掘削が行われる。	開発深度は最深1600mに達するようになり、掘削当初は大量に自噴する。最高温度は58℃を示した。その後、自噴量は徐々に減少し、既存源泉は徐々に水位低下した。	1986年5月、1源泉で水位観測を開始	1982年頃から帯広市内での水位低下・資源枯渇問題について道衛生部・温泉審議会での検討を開始。1986年12月より、市内中心部半径3km圏について準保護地域に指定する。
1987～2003年	1988年の保護対策施行後は開発地域が保護地域・準保護地域に隣接する場所で活発に開発が行われるようになった。1996年までに11源泉の開発が行われた。	自噴源泉の自噴量は減少し動力揚湯への切り替え、水位低下が継続する。保護対策施行後、一時的に水位低下の鈍化傾向が現れたが1996年頃から再び水位低下率が大きくなる。	1987年10月、1源泉で水位測定開始。1987年12月衛生部、温泉保護対策調査開始（業務課・帯広保健所、地下資源調査所共同）、1988年10月以後、市で2源泉水位測定開始、以降2源泉でも水位の測定が始まる。1992年6月には地下資源調査所、1源泉で水位測定を開始する。	1987年7月、市の温泉保護対策懇話会発足、1988年12月より市中心部を保護地域指定、隣接する西帯広地域について準保護地域指定が行われる。
2004年～	2004年以降は、準保護地域で若干掘削されているが、源泉総数はほとんど増加していない。	化石燃料価格の高騰等により、温泉熱利用が積極的に行われている地区もあり、汲み上げ量は減っていないようである。	現在のモニタリング体制、道保健福祉部が中心となり、毎年1～2回、湧出量、泉温、水位等の現地調査を実施している。連続モニタリングに関しては、温泉水位観測4箇所、泉温は3箇所、他地下水井3箇所まで水位観測も行われている。	2005年5月より準保護地域が拡大、保護地域は1源泉当たりの揚湯量を最大150L/分、準保護地域は300L/分に制限する。

動力装置の際の影響調査実施手法及び揚湯試験実施手法

I 影響調査

1. 観測源泉の選定

動力の装置が「温泉のゆう出量、温度又は成分に影響を及ぼす」か否かを判断するため、動力を装置しようとする源泉（以下「対象源泉」）の周辺の既存源泉を「観測源泉」として捉え、当該観測源泉における影響の程度を調査する。

観測源泉の選定に当たっては、対象源泉からの距離、温泉採取深度、地質の構造、泉質の類似性等を考慮した上での位置関係、予測される影響範囲、測定の実易度等を考慮して、抽出することが適当である。なお、観測源泉数については、地域の特性や予想される影響の範囲を考慮し、設定すべきと考える。

2. 測定項目

2-1 観測源泉

源泉間の影響関係でもっとも鋭敏に反応するのは水位（自噴の場合には湧出量と孔口圧力（静止水頭））であり、温泉の温度や成分等への影響は、一般的に上記の項目に次いで変化が現れる項目である。

このため、影響調査で必須の測定項目は、水位（自噴では孔口圧力）、湧出量、次いで温度である。温泉法に基づく温泉成分分析は状況に応じて適宜測定すべき項目となるが、観測源泉の温度や成分濃度のみが変化が問題となることが予測される場合は、重要な成分項目を把握することが必要となる。なお、主要な成分分析のほかに、電気伝導率の測定による確認が簡易的な状況把握の方法として挙げられる。

2-2 対象源泉

対象源泉においても、観測源泉との影響関係を検討するために、原則として観測源泉と同一の項目を測定する必要がある。

3. 測定に使用する機器

測定に使用する機器は例として以下のような機器があり、現場の状況に応じて、自動記録方式、機器の指示値の読み取り、現地測定を組み合わせた測定態勢を取ること

になる。電気伝導率は携帯型測定器を用いて測定することが可能である。

なお、観測源泉において、これらの機器の設置ができない場合、あるいは複数の項目が測定困難な場合は、測定可能な項目をもって影響の有無を判断せざるをえない。しかし、水位、湧出量がともに測定できない場合は、観測源泉としては不向きであるので別の周辺源泉を観測源泉とする等の対応も考えられる。なお、他に測定に適した源泉が存在しない場合は、単一井（対象源泉のみ）による影響調査を行うことも考えられる。

3-1 機器による測定

測定項目	主な機種等	規格
水位	圧力式等	±0.1% FS（フルスケール）程度
湧出量	電磁式等	±2%指示値
孔口圧力	圧力発信器等	測定精度±1% FS
温度	測温抵抗体等	分解能 0.1℃
記録方式	アナログ記録、デジタル記録、表示値の読み取り等	連続記録、定時での記録

3-2 観測員による定時測定

測定項目	主な機種等	測定
水位	触針式（ロープ式）等	1cm 単位以下で読み取り
湧出量	容積法、ノッチ法等	L/分単位で有効数字三桁程度
孔口圧力	ブルドン管式等（測定精度±1.6% FS 程度）	機器の指示値
温度	デジタル温度計等（分解能 0.1℃）と標準温度計の併用	0.1℃単位で現地測定
記録方式	—	現地測定・記録

4. 影響調査の実施期間

影響調査に当たっては、対象源泉を揚湯しない状態での測定（事前調査）、対象源泉を揚湯した状態での測定（本調査）、対象源泉の揚湯を停止した後における状態での測定（事後調査）の3つの期間を設定する。以下に実施期間の目処を記すが、温泉の採取層の特性や実情（距離、地質の構造、採取深度等）により、必要とされる日数は、大きく変わること留意し、影響による変動が継続し安定しない等、影響の程度を把握することが困難な場合は、調査期間を延長する、もしくは対象源泉の採取量を変更する等の対応が必要とされる。

4-1 事前調査

観測源泉の通常期（対象源泉による揚湯が行われていない状態）の湧出状況を把握するためのものである。測定に必要とする期間は源泉の特性によるが、変動が少なく安定している源泉であれば3日間程度を目処とする。降水量や潮汐等の自然的要因による変動が大きい場合には、調査前の状況を詳細に把握するために、より長い期間を要することに留意する。この調査期間の測定内容は以下の通りとする（重要な項目から順に記す）。

a) 対象源泉での測定

水位（静水位）

b) 観測源泉での測定

揚湯の場合：水位（静水位、動水位）、湧出量、温度、
その他（電気伝導率、重要な成分項目の分析等）
自噴の場合：孔口圧力（静止水頭）、湧出量、温度、
その他（電気伝導率、重要な成分項目の分析等）

4-2 本調査（1段階で1日程度、5段階を目処）

観測源泉において、対象源泉の湧出量に応じた影響の有無とその程度を確認するため、対象源泉の湧出量を段階的に増やす増加する方式を推奨する。湧出量の設定は、動力揚湯の場合、下限は使用するポンプで制限可能な最小揚湯量、上限は採取制限量が定められている場合には許可制限量、もしくは対象源泉の適正揚湯量又は計画採取量とし、5段階程度に区分する。1段階の揚湯期間は1日程度を目安とするが、最終的な影響の程度の確認が重要となるので状況により調整する。この間での揚湯時間（例えば、終日運転か昼間のみの運転か等）については、温泉の採取状況等を勘案して決定する。

対象源泉の 5 段階以上の揚湯量の設定が困難な場合は、状況に応じて段階を設定することとし、調査期間はその段階設定に対応することになる。

なお、この調査期間の測定内容は以下の通りとする（対象源泉・観測源泉ともに共通であり、重要な項目から順に記す）。

- ・ 水位（自噴の場合は孔口圧力（静止水頭））
- ・ 湧出量
- ・ 温度
- ・ その他（電気伝導率、重要な成分項目の分析等）

4-3 事後調査

影響調査時に出現した変動が対象源泉によるものか否か（影響要因となるか否か）を再確認するものであり、対象源泉揚湯停止後の変動を測定する。測定に必要とする期間は源泉の特性により異なるが、本調査の結果を目処に判断する（3日間程度を目処）。本調査時に明確な変動がなければ、事後調査の実施は省略することもできる。この調査期間の測定内容は以下のとおり通りとする（重要な項目から順に記す）。

a) 対象源泉での測定

水位（静水位）

b) 観測源泉での測定

揚湯の場合：水位（静水位、動水位）、湧出量、温度、その他（電気伝導率、重要な成分項目の分析等）

自噴の場合：湧出量又は孔口圧力（静止水頭）、温度、その他（電気伝導率、重要な成分項目の分析等）

5. 測定方法

5-1 自動記録

アナログ記録計（ペン式又は打点式）では連続記録、デジタル自動記録計による場合のデータサンプリング間隔は 10 分程度を目安とし、前者の場合は連続記録をそのまま図化するかもしくは 10 分間隔程度でデータを読み取る。

5-2 観測員による定時測定

a) 水位又は孔口圧力（静止水頭）（対象源泉・観測源泉ともに共通）

対象源泉の揚湯開始又は停止を起点として、最初は短い間隔で測定し、変動が小さくなるに従い徐々に測定間隔を長くすることが考えられる。測定例を以下に示す。

《測定例》

経過時間	測定間隔
0 ～30分	: 1～5分
30 ～60分	: 5～10分
60 ～120分	: 10～30分
120分～	: 30～60分（より長期の場合も60分を目処とする）

b) 湧出量・温度（対象源泉・観測源泉ともに共通）

原則60分間隔を目安とする。

c) 上記の実施が困難な場合

夜間の観測員による定時測定が場所や利用状態によっては困難となることもある。そのため、測定間隔は柔軟に対処し、これに応じて測定の実施期間も変更すべきである。

5-3 影響調査時の観測源泉の状態

影響調査時の観測源泉は、未利用休止状態で水位（静水位）や孔口圧力（静止水頭）を測定するのが理想であるが、実際は温泉を利用しているために水位等の測定が困難なケースが多い。利用している源泉では、長期にわたり揚湯（自噴）を休止することは困難であるので、影響調査期間中は観測源泉および周辺源泉の揚湯（自噴）状態をできる限り一定とすることが望ましい。

特に間欠的な揚湯を行っている源泉の場合は、対象源泉の影響を誤認しないように、調査期間中はできれば一定の揚湯状態を維持すること。これが実現困難な場合は、通常状態における運転状況を観察・記録し、その影響の程度を把握することが考えられる。

6. その他特記事項

6-1 関連データの収集

一般的に浅深度で湧出する温泉は、降水量や潮汐等の自然的要因を含む周辺環境の影響を受け、常に変化するものである。影響調査時には、直近の気象観測点の気象データ（降水量、気温、気圧等）とともに、付近の河川水位や潮位等のデータも収集・整理し参考とする（国土交通省、気象庁等の公表データ等を活用する）。

また、温泉の湧出状況は、地下水位の影響も受けていることがある。源泉分布域の中に水井戸が存在していることが確認できる場合、その揚水量や揚水時間、水位等を測定して参考資料とすることも考えられる。大深度掘削泉の場合は、事前調査の状況から上記した項目から必要な資料を判断する。

6-2 測定間隔や揚湯期間の変更

対象源泉、観測源泉の水位は、揚湯後速やかに安定する場合と、安定しない場合とがある。影響調査での揚湯期間は1段階につき1日程度としたが、早期に水位が安定する場合は、これよりも短い揚湯期間で影響判断が可能なることもある。一方で、水位が低下し続け安定しない場合は、揚湯期間を延長する必要もあり得る。要は、状況に応じた適切な方法を採用し、影響量を確認することが重要であり、測定間隔をより短くしたり、測定期間をより長くしたりすることは差し支えない。

6-3 調査の協力が得られない場合について

既存源泉所有者等にとっては、温泉資源への影響調査を通じて、源泉の健全性や異常の有無等により、自己が所有する源泉の状態把握や井戸の適切な維持・管理が可能となる。また併せて、将来、近傍で新たな温泉掘削等が行われる場合において、当該温泉掘削等により所有源泉に影響が生じた際の科学的根拠となる貴重なデータともなる。

なお、既存源泉所有者は調査に協力しない場合に、所有源泉に何らかの影響が生じたことを主張する際には、源泉所有者自身が影響関係を科学的に証明しなければならないこともある。影響調査に関する趣旨の説明は、事前に周知するほか、都道府県が既存源泉所有者に協力を依頼する際に個々に説明を実施する方法も考えられる。どうしても協力が得られない場合は、例えば揚湯試験結果から単一井による推定を行ったり、他源泉への影響量から推定する等、他の方法により推定を行うことも可能であると考えられる。なお、既存源泉所有者は可能な限り協力することが重要であり、所有源泉をはじめとする地域の温泉資源保護のためにも、こうした協力は源泉所有者に求められることである。

II 揚湯試験（集湯能力調査）

1. 揚湯試験の種類と目的

段階揚湯試験による限界揚湯量とその結果から判断する当該井戸の能力評価の適正揚湯量の検討は、その後の連続揚湯試験での設定揚湯量を調べるための調査であり、連続揚湯試験により過度な水位低下を招くことのない水位の安定を確認し、持続的に安定して採取できる温泉の量に調整することで、温泉資源の保護を図ることが主目的である。ただし、個々の源泉における揚湯試験でいて適正と判断した源泉個別の適正揚湯量の総計が、必ずしも地域の適正揚湯量ではなく、過大となる超えてしまうことがあることにも注意が必要である。そのため、適正揚湯量の検討には、揚湯試験結果だけでなく前述前記した影響調査結果やモニタリングによる温泉資源動向も考慮しての判断が必要とされることもある。

1-1 予備揚湯試験

孔内洗浄の後、実際にポンプを使用して揚湯を行って揚湯量と水位との関係を確認し、段階揚湯試験等の計画を立てるための基礎資料を得るのが予備揚湯試験である。調査期間は1日程度を目処とする。このため予備揚湯試験の結果を踏まえて、段階揚湯試験、連続揚湯試験においては、それぞれの試験に適合する能力のポンプを準備する必要がある。なお、孔内洗浄が不十分であったり、試験の条件に適合しないポンプでは揚湯試験が適切に行えない場合もある。

1-2 段階揚湯試験

この試験は、揚湯量を段階的に変えて、その段階ごとの揚湯量と水位（水位降下量）との関係の調査であり、5段階以上で実施することを基本とする。設定する最大揚湯量は、湧出量に関する採取制限量が定められている場合にはその制限量を、採取制限量が定められていない場合は使用するポンプの能力又はその源泉から採取可能な量とし、最小揚湯量は使用するポンプで制限可能な量とする。

1段階の揚湯時間は、最低1時間とするが、調査時間を延長しても水位が安定しない場合は、おおよその水位の安定をもって次の段階に移行せざるを得ない場合もある。なお、採取可能な量が少ないときは、その採取量の範囲内で可能な段階を設定するものとし、さらに少なければ、次の連続揚湯試験のみを実施することになる。

1-3 連続揚湯試験

段階揚湯試験で得られたデータを基に、湧出量に関する採取制限量が定められている場合には、その制限量の範囲内で、試験実施者がその源泉で適正と算出した量又は将来的に採取することになる計画採取量に設定して、一定の量で長期間の揚湯を行う試験である。この試験の所要日数は、水位が安定化するまでを基本とし、3～7日間程度を目処に安定を確認する。

揚湯変動試験におけるおおよその安定の目安は段階揚湯試験では、1時間当たりの水位変動量が全体水位変動量のおおむね0.2%以内となるまでとする。連続揚湯試験では、6時間当たりの水位変化量が全体水位変化量のおおむね0.2%以内となるまでを目安とする。~~(なお、平成21年3月策定のガイドラインでは、全体水位変化量の0.1%以内と示していたが、温泉では一般的な地下水と異なり様々なケースが考えられるため目安を0.2%以内と変更した)~~。ただし、こういった数値は**目安目標値**であり、~~例えば0.2%以内でも継続的に水位が低下しているような場合は、完全に安定しているとは言えないケースもあり、~~ガスを多く含むような**温泉温泉**では、~~測定が難しくどうしても安定しないこともある。また、0.2%以内でも継続的に水位が低下しているような場合は、完全に安定しているとは言えないこともあり、~~水位が安定しない場合は、試験期間を延長したり、使用する機器の精度や温泉の特性、水位変化の様相も考慮しての**総合的な判断が重要となる**である。

コメント[事務局1]: 委員

安定水位については、いろいろな考え方はあっても、最終的に水位変化の様子(時系列グラフ)を俯瞰した時に、初めてそれが許容範囲にあるかどうか判断できるというのも事実です。

(対応)

温泉の性状や使用する機器、水位降下量によって変わる要素であるので、安定水位は目標値ということ等の注意点を加筆しました。

1-4 回復試験

連続揚湯試験から引き続く試験であり、揚湯を停止した後の水位回復状況を測定するものである。測定期間は1日以上とする。

2. 揚湯試験の測定項目と測定方法

揚湯試験で測定すべき項目と測定間隔は、「I 影響調査 5. 測定方法 5-2 観測員による定時測定」と同様に実施すること。

3. 揚湯試験の測定機器

揚湯試験に使用する測定機器は、「I 影響調査」の項で記した測定機器を援用すること。

4. 揚湯試験の測定期間

対象源泉の水位は、試験開始後速やかに安定する場合と、安定しない場合とがある。速やかに水位が安定する場合は、上記に示したよりも短い揚湯期間で影響判断が可能なこともある。一方で水位が安定しない場合は、揚湯期間を延長する必要もあり得る。

5. 特殊な事例

揚湯に伴い水位が上昇する、湧出量が少なく上記した通常の揚湯試験が行えないなどの特殊事例については、水位が安定する適正揚湯量を何らかの方法で判断する必要がある。参考までに事例について別紙 12Ⅱ 及びⅢに紹介する。

6. 揚湯試験実施要領事例

都道府県によっては揚湯試験に関する実施要領を作成し申請手続きの円滑化を図っているところがある。以下に、[神奈川県小田原保健福祉事務所神奈川県](#)の例を揚湯試験実施要領と記載例の抜粋を紹介する。

揚 湯 試 験 実 施 要 領

1 目的

源泉の適正揚湯量を把握して、温泉資源の保護を図ることを目的とする。

2 実施方法

揚湯試験は、段階揚湯試験、連続揚湯試験及び水位回復試験とし、この順で実施する。

(1) 測定値の記述について

泉温（℃）：小数点以下第1位まで測定する。

水位（m）：地表面を基準とし、小数点以下第2位まで測定する。

揚湯量（L/分）：整数で表示する。

(2) 揚湯試験を行う前に、事前準備として孔内洗浄及び予備揚湯を行い、動力や源泉井戸の揚湯特性の概要を把握する。

(3) 段階揚湯試験

① 自然水位（揚湯していない状態での水位）を測定する。自噴泉の場合も可能な限り測定する。

ア 自噴していない源泉の場合

動力を用いて揚湯している温泉などは温泉水頭が地表下に位置しているの
で、その静水位を測定して自然水位とする。

イ 自噴している源泉の場合

自噴状態の泉温及び湧出量を測定する。測定後、湧出口を地表よりも高くし
ていくと自噴量が減少し、ある高さになると全く停止する。このときの高さ
を自然水位とする。

② 5段階以上の揚湯量を決定する。利用計画に基づいた必要な揚湯量を基準にし
て、それよりも少ない揚湯量、多い揚湯量をそれぞれ2～3段階設定する。あ
るいは揚湯試験に用いる動力装置による最大揚湯可能量を5等分して基準に
する方法などがある。

③ ②で設定した揚湯量について、最小揚湯量から順に各段階の揚湯量で継続し
て揚湯しながら、時間の経過と共に動水位及び水温の変化を測定する。各段
階の試験は動水位が安定するまで（目安としては水位の低下速度が1時間に
0.1m以下となるまで）行う。

④ 測定により得られた結果から、各段階における揚湯量（Q）を横軸に、自然
水位からの水位降下量（S）を縦軸に取った揚湯量－水位降下量図（Q－S
図）を作成する。揚湯量－水位降下量図は両対数グラフで作成し、縦軸と横
軸の目盛りは等倍であることが望ましい。

⑤ 揚湯量－水位降下量図において、揚湯量と水位降下量の関係を示す線が、両
対数グラフの対角線（傾き1の直線）よりも急になる最初の点の揚湯量が限
界揚湯量となり、その80%を適正揚湯量とする。揚湯量－水位降下量図によ
り限界揚湯量が見出せない場合、段階揚湯試験を実施した最大の揚湯量を限
界揚湯量とみなすこととする。

（4） 連続揚湯試験

段階揚湯試験により設定した適正揚湯量で連続して揚湯し、時間の経過と共に動
水位及び泉温の変化を測定する。連続揚湯試験は動水位が安定するまで（水位の
低下速度が1時間に0.1m以下となるまで）行う。

（5） 水位回復試験

連続揚湯試験の終了と共に揚湯を停止し、時間と共に水位、温度がどのように回
復するかを測定する。水位が自然水位まで回復し、安定（水位の上昇速度が1時
間に0.1m以下となるまで）した時点で終了する。

3 結果のまとめ

揚湯試験の結果は以下のように整理する。(2)～(4)については記載例を参考に作成すること。

- (1) 揚湯試験結果表 (別紙①)
- (2) 段階揚湯試験結果 (記載例 1-1、1-2)
- (3) 連続揚湯試験・水位回復試験結果 (記載例 2)
- (4) 揚湯量-水位降下量図 (Q-S 図) (記載例 3)

4 その他

- (1) 上記の規定により試験を実施することが困難な場合は、個別に指導するものとする。
- (2) 試験においては排水、騒音など周辺環境に配慮して行うこと。
- (3) 水位、温度の測定間隔の目安

各試験の測定時間の間隔は、開始直後はできるだけ細かく測定し、間隔を開けるのは水位の変化が緩やかになってからにすること。

例) 開始後10分までは1分間隔、10分から30分までは5分間隔、30分から60分までは10分間隔、60分以降は30分、60分間隔など。

(別紙①)

揚 湯 試 験 結 果 表

試験 実施日	年 月 日 ~ 年 月 日					
試験 実施者	住所	TEL - -				
	氏名	(担当者氏名:)				
源泉 所有者	住所	TEL - -				
	名称					
源 泉	所在地					
	名 称					
	深 度	m	掘削口径	mm	水止め位置	m
動力の 能力,形式						
試 験 結 果						
区分	揚湯量 (L/分)	動水位 GL-(m)	水位降下量 (m)	泉温 (℃)	揚湯時間 (分)	備 考
自然水位						
第1段階						
第2段階						
第3段階						
第4段階						
第5段階						
連続 揚湯試験						

(記載例 1 - 1)

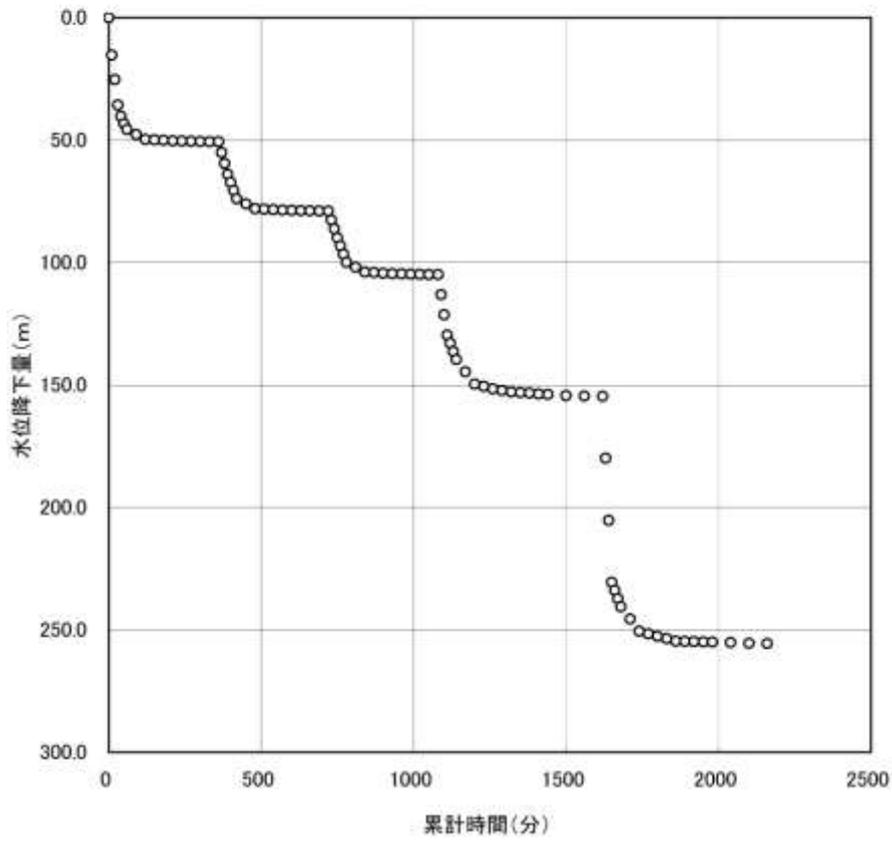
段階揚湯試験結果

(平成 年 月 日 ~ 平成 年 月 日)

時間 (分)	累計時間 (分)	水位 (m)	水位 降下量 (m)	泉温 (℃)	揚湯量 (L/分)
0	0	77.7	0.0		0
10	10	93.0	15.3		50
20	20	103.0	25.3		50
30	30	113.4	35.7		50
40	40	118.0	40.3		50
50	50	121.0	43.3		50
60	60	123.4	45.7		50
90	90	125.4	47.7		50
120	120	127.4	49.7		50
150	150	127.6	49.9		50
180	180	127.8	50.1	27.8	50
210	210	128.0	50.3		50
240	240	128.1	50.4		50
270	270	128.2	50.5		50
300	300	128.3	50.6		50
330	330	128.4	50.7		50
360	360	128.4	50.7	28.0	50
10	370	132.8	55.1		80
20	380	137.2	59.5		80
30	390	141.7	64.0		80
40	400	145.0	67.3		80
50	410	148.3	70.6		80
60	420	151.7	74.0		80
90	450	153.7	76.0		80
120	480	155.7	78.0		80
150	510	155.9	78.2		80
180	540	156.1	78.4	28.3	80
210	570	156.3	78.6		80
240	600	156.4	78.7		80
270	630	156.5	78.8		80
300	660	156.6	78.9		80
330	690	156.7	79.0		80
360	720	156.7	79.0	28.5	80
10	730	160.3	82.6		110
20	740	163.9	86.2		110
30	750	167.6	89.9		110
40	760	170.9	93.2		110
50	770	174.3	96.6		110
60	780	177.6	99.9		110
90	810	179.6	101.9		110
120	840	181.6	103.9		110
150	870	181.8	104.1		110
180	900	182.0	104.3	29.3	110
210	930	182.2	104.5		110
240	960	182.3	104.6		110
270	990	182.4	104.7		110
300	1020	182.5	104.8		110
330	1050	182.6	104.9		110
360	1080	182.6	104.9	29.5	110
10	1090	190.8	113.1		130
20	1100	199.0	121.3		130
30	1110	207.3	129.6		130
40	1120	210.6	132.9		130
50	1130	214.0	136.3		130
60	1140	217.3	139.6		130
90	1170	222.3	144.6		130
120	1200	227.3	149.6		130
150	1230	228.3	150.6		130
180	1260	229.3	151.6	31.2	130
210	1290	230.0	152.3		130
240	1320	230.5	152.8		130
270	1350	230.8	153.1		130
300	1380	231.0	153.3		130
330	1410	231.4	153.7		130
360	1440	231.6	153.9	31.3	130
420	1500	232.0	154.3		130
480	1560	232.2	154.5		130
540	1620	232.3	154.6	31.5	130
10	1630	257.6	179.9		160
20	1640	283.0	205.3		160
30	1650	308.3	230.6		160
40	1660	311.6	233.9		160
50	1670	315.0	237.3		160
60	1680	318.3	240.6		160
90	1710	323.3	245.6		160
120	1740	328.3	250.6		160
150	1770	329.3	251.6		160
180	1800	330.3	252.6	33.5	160
210	1830	331.3	253.6		160
240	1860	332.3	254.6		160
270	1890	332.4	254.7		160
300	1920	332.5	254.8		160
330	1950	332.6	254.9		160
360	1980	332.7	255.0	33.6	160
420	2040	332.9	255.2		160
480	2100	333.2	255.5		160
540	2160	333.3	255.6	33.8	160

(記載例 1 - 2)

段階揚湯試験結果



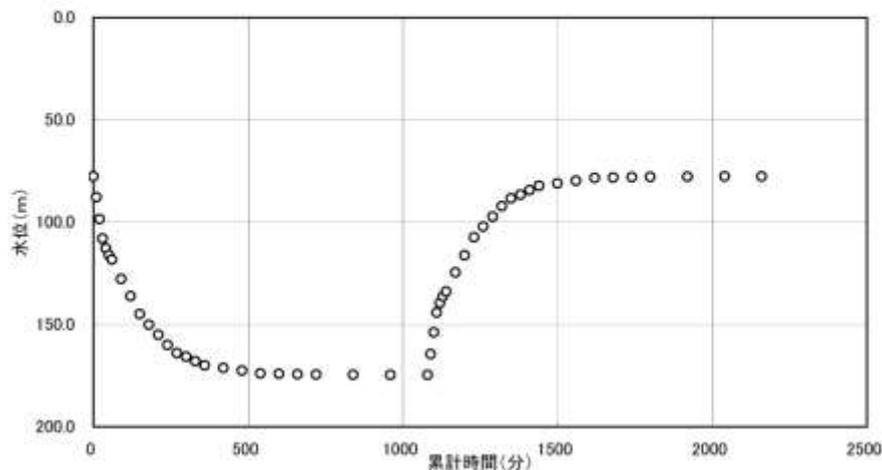
(記載例2)

連続揚湯試験・水位回復試験結果

(平成 年 月 日 ~ 平成 年 月 日)

時間 (分)	累計時間 (分)	水位 (m)	水位 降下量 (m)	泉温 (°C)	揚湯量 (L/分)	時間 (分)	累計時間 (分)	水位 (m)	水位 降下量 (m)	泉温 (°C)	揚湯量 (L/分)
0	0	77.7	0.0		100	10	1090	164.5	86.8		-
10	10	87.9	10.2		100	20	1100	153.9	76.2		-
20	20	98.5	20.8		100	30	1110	144.3	66.6		-
30	30	108.1	30.4		100	40	1120	139.6	61.9		-
40	40	112.8	35.1		100	50	1130	136.3	58.6		-
50	50	116.1	38.4		100	60	1140	134.0	56.3		-
60	60	118.4	40.7		100	90	1170	124.6	46.9		-
90	90	127.8	50.1		100	120	1200	116.2	38.5		-
120	120	136.2	58.5		100	150	1230	107.4	29.7		-
150	150	145.0	67.3		100	180	1260	102.2	24.5		-
180	180	150.2	72.5	28.8	100	210	1290	97.3	19.6		-
210	210	155.1	77.4		100	240	1320	92.3	14.6		-
240	240	160.1	82.4		100	270	1350	88.4	10.7		-
270	270	164.0	86.3		100	300	1380	86.6	8.9		-
300	300	165.8	88.1		100	330	1410	84.4	6.7		-
330	330	168.0	90.3		100	360	1440	82.3	4.6		-
360	360	170.1	92.4	29.0	100	420	1500	81.1	3.4		-
420	420	171.3	93.6		100	480	1560	79.8	2.1		-
480	480	172.6	94.9		100	540	1620	78.4	0.7		-
540	540	174.0	96.3		100	600	1680	78.2	0.5		-
600	600	174.2	96.5		100	660	1740	78.0	0.3		-
660	660	174.4	96.7		100	720	1800	77.9	0.2		-
720	720	174.5	96.8		100	840	1920	77.8	0.1		-
840	840	174.6	96.9		100	960	2040	77.7	0.0		-
960	960	174.7	97.0		100	1080	2160	77.7	0.0		-
1080	1080	174.7	97.0	29.1	100						

連続揚湯試験、回復試験結果



(記載例3)

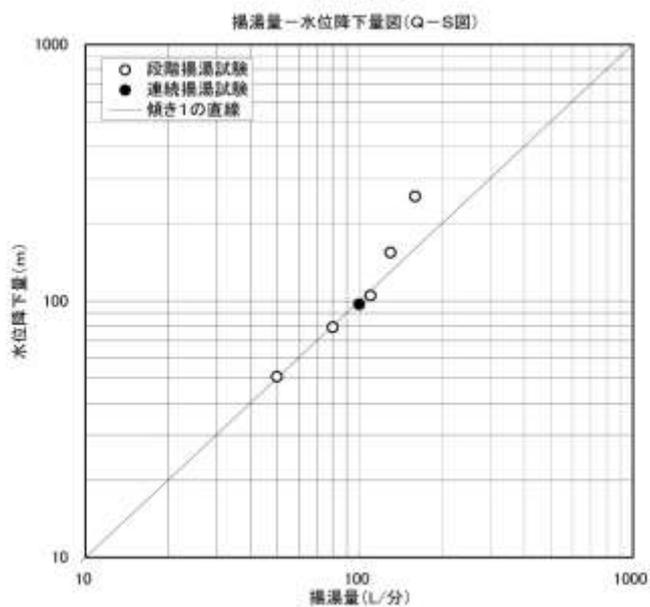
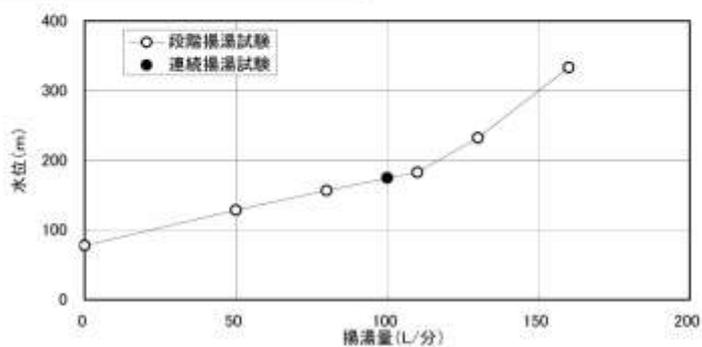
揚湯量－水位降下量図

段階揚湯試験結果

揚湯量 (L/分)	水位 (m)	水位降下量 (m)	経過時間 (分)	泉温 (°C)
0	77.7	-	-	-
50	126.4	50.7	360	28.0
80	156.7	79.0	360	28.5
110	182.6	104.9	360	29.5
130	232.3	154.6	540	31.5
180	333.3	255.6	540	33.8

連続揚湯試験結果

揚湯量 (L/分)	水位 (m)	水位降下量 (m)	経過時間 (分)	泉温 (°C)
0	77.7	-	-	-
100	174.7	97.0	1080	29.1



揚湯試験実施要領

<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/2985.pdf>

揚湯試験実施要領記載例

<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/2986.pdf>

(2011年3月31日更新) 施行日一確認中

影響調査事例

I 掘削深度の浅い温泉での事例

1. 影響調査の背景および源泉状況

~~掘削深度の浅い温泉での事例として別府温泉の事例を紹介する。各源泉の掘削深度はおおむね 100～200m であり、狭い範囲に数多く分布している。当時、別府温泉及びその周辺では揚湯泉の増加と共に自噴泉の数や湧出量が減じたことから揚湯に伴う既存源泉への影響調査が数多く行われている。ある。~~

~~ここでは、昭和 43 年から 44 年に北石垣地区と鉄輪地区で実施された調査結果事例の一部を抜粋する。当時、別府温泉及びその周辺では揚湯泉の増加と共に自噴泉の数や湧出量が減じたことから揚湯に伴う既存源泉への影響調査が数多く行われている。ここでは、昭和 43 年から 44 年に北石垣地区と鉄輪地区で実施された調査結果事例の一部を抜粋する。~~

2. 調査の方法

ある源泉で揚湯を行い、揚湯源泉から半径 100m 以内にある既存源泉の水位変化、湧出量変化を測定している（図中の円の半径は 100m）。~~各源泉の掘削深度はおおむね 100～200m である。~~

当時は、自噴源泉数が減少し、代わりにエアリフトポンプによる揚湯泉が増加していた。~~そのため、~~影響調査中に周辺で不定期的な揚湯があれば、その影響が測定結果に現れて解析を困難にするおそれがあるため、温泉が揚湯停止状態にあると考えられる 9 時から 17 時の間を選び、揚湯源泉から半径 100m 以内の温泉は停止状態にあることを確かめて調査が行われている。

3. 調査の結果

3-1. 北石垣地区温泉

No. 1064 源泉の揚湯試験では、No. 1064 の 50L/分程度の揚湯開始及び揚湯停止に伴って、No. 1077、No. 1065、No. 1063 源泉に水位の低下と回復という反応が認められたが、揚湯源泉に最も近い No. 1062 では明確な反応が認められなかった（図 1）。これは、No. 1062 源泉はケーシング管が傷んでおり、湧出温度も他の温泉に比べ低いことから、浅い層からも温泉水を採取している

ことが考えられる。

3-2. 鉄輪地区温泉

No237 源泉の揚湯試験では、No. 237 の 40L/分程度の揚湯開始及び揚湯停止に伴い、白垣、河野、原、林田源泉には、水位の低下と回復という反応が認められる。一方、揚湯源泉の北東方向に位置する No221 の湧出量の変動は不明瞭なものとなっており、影響量は小さいことが伺える（図 3）。

4. まとめ

影響による水位低下量は、揚湯泉に近いほど大きい傾向があるが、方向性が認められ、中には揚湯泉よりも離れている場所でかえって大きい水位低下量が現れていることもある。このような結果は、測定法の問題もあるかもしれないが、各源泉の採取層の違いや、地質構造の不均一性などにも由来するところが大きいと考えられる。

5. 引用参考文献

山下幸三郎・由佐悠紀（1969）別府温泉の源泉保護について（Ⅲ）北石垣、鉄輪地区温泉の揚水影響，大分県温泉調査研究会報告，209 - 32.

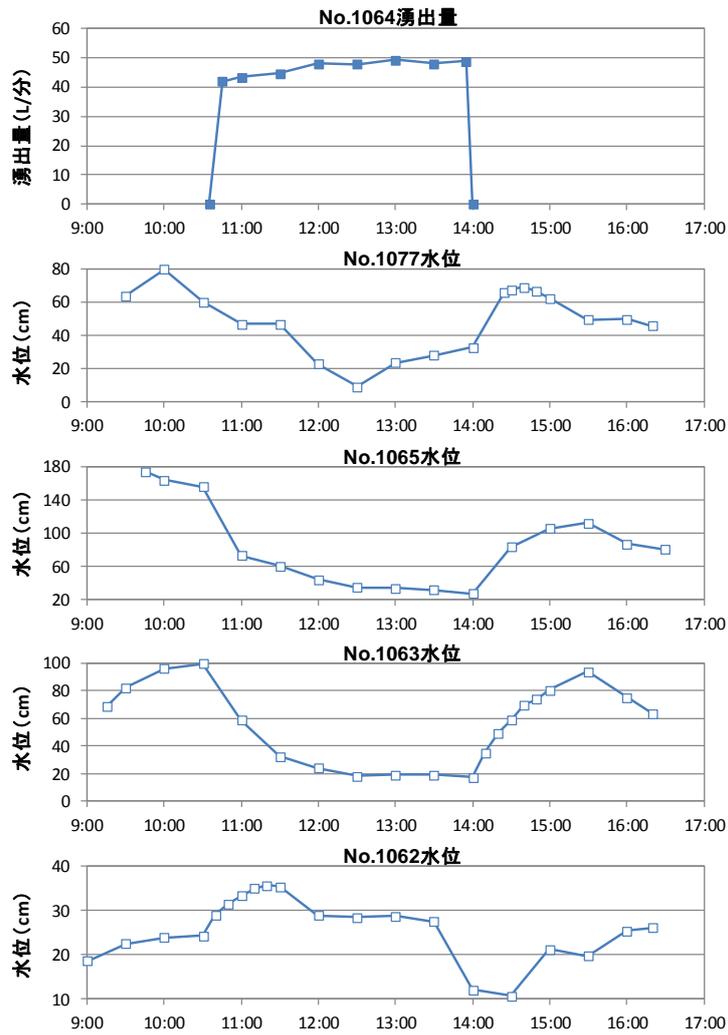


図1 北石垣 No. 1064 の揚湯に伴う周辺温泉水位変化

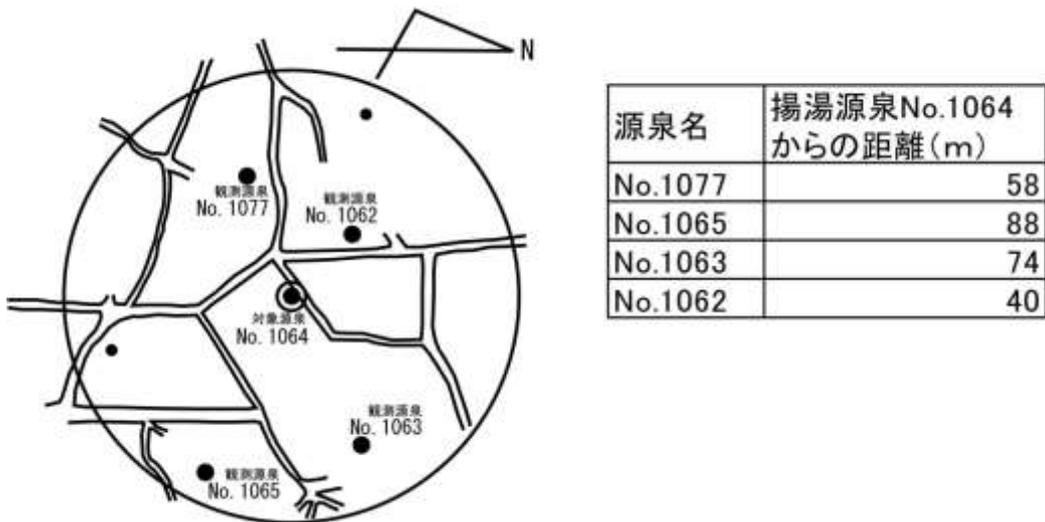


図2 北石垣 No. 1064 周辺源泉位置と距離関係

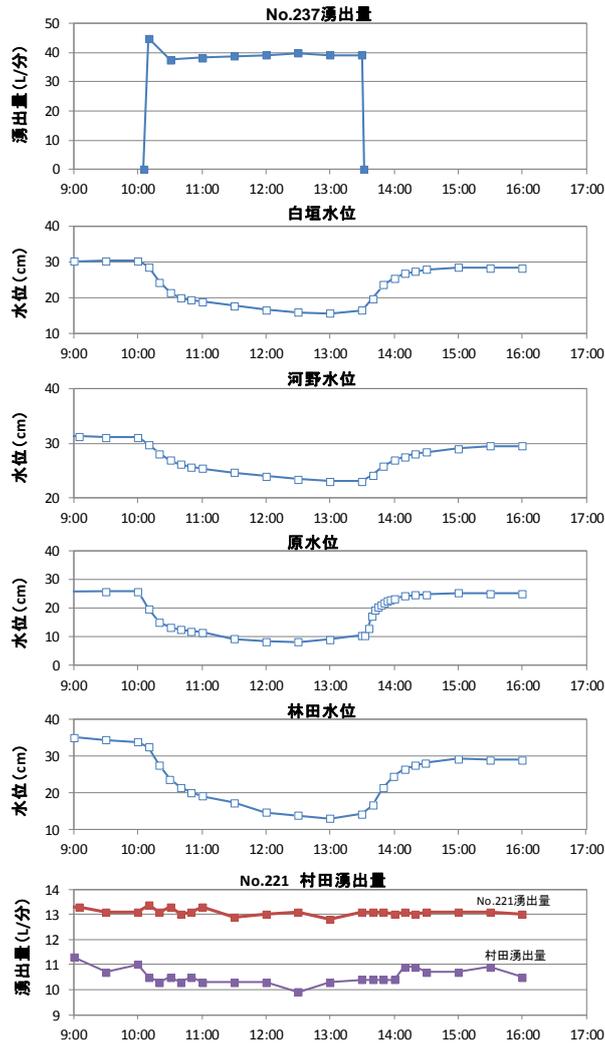


図3 鉄輪 No. 237 の揚湯に伴う周辺温泉水位または湧出量変化

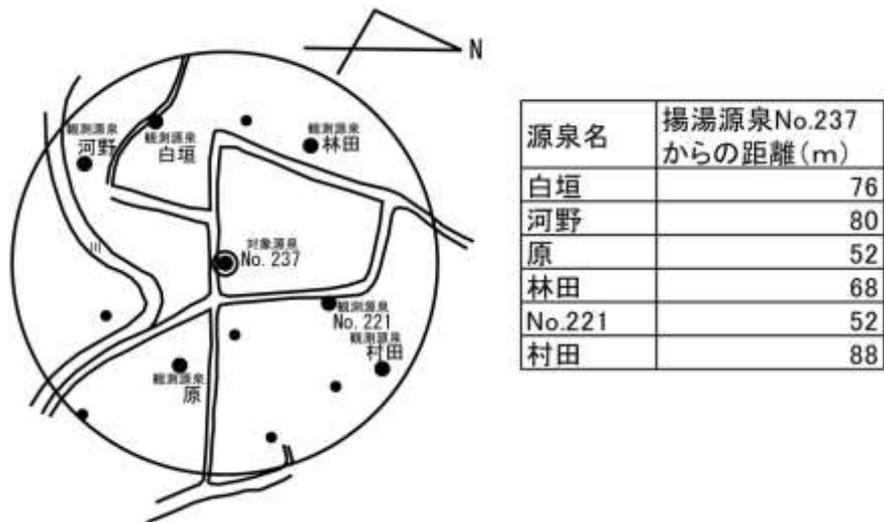


図4 鉄輪 No. 237 周辺源泉位置と距離関係

Ⅱ 大深度掘削泉での事例

1. 影響調査の背景および源泉状況

当該温泉地では掘削深度約 1400m の 1 源泉を複数の利用施設で分湯し利用がなされていた。そこから約 550m 離れた場所に掘削深度約 1300m の新たな温泉掘削が行われ、予備揚湯および揚湯試験時に影響調査がは実施された。

既存源泉ではは普段から、温度、水位の機器モニタリングが行われており、間欠揚湯のため、1日の最高値と最低値が各々記録されている。~~そのため、~~調査期間中はできるだけ一定周期での間欠揚湯利用とし揚湯量を出来るだけ変えないようにはしている。

2. 調査方法と結果

~~既存源泉は 1 日の最高値と最低値が記録されている。~~源泉の利用状況に関しては稼働と停止を約 10 分おきに繰り返す間欠揚湯利用である。毎日の最高温度が揚湯時の温度、毎日の最低水位は揚湯時に記録されたものと考えて良い。この揚湯量に関してはモニタリング記録されていないが、利用施設への送湯状況から揚湯量はおおむね 200～2200L/min 程度とされている。事前のモニタリング結果から浅層から低温水が侵入していることは判明しているので判断には注意を必要とした。~~事前のモニタリング結果から既存源泉は温泉採取量を増加させると水位の低下に伴い低温水を取り込むことが判明しているので判断には注意した。~~

申請源泉の孔内洗浄、予備揚湯開始に伴い既存源泉の水位、水温（毎日の最高・最低値最高・最低値）はいずれも低下傾向を示しており、連続揚湯試験②中に最低値を示した後、申請源泉の揚湯停止後、回復傾向を示している申請源泉の揚湯停止後、回復傾向を示している（図 5）。毎日の水位最低値の変化を見ると申請源泉の揚湯期間において、既存源泉水位には最大で 2m 以上の水位低下が認められる。既存源泉水位には 1～2m 程度の水位低下が認められる。このことから、申請源泉の揚湯量に応じて既存源泉の水位は変動していると判断され、~~おり、~~両源泉間は相互に干渉している可能性が高いと考えられた。既存源泉の毎日の温度最高値（揚湯時水温）に 4～5℃もの変化が生じた原因は定かではないが、影響による水位（~~孔内圧力~~）の低下に伴い低温水混入量が増加したためではないかと推定されている。

3. 調査結果の判断とその後の対応

申請源泉の連続揚湯試験で設定した揚湯量 390L/min では、既存源泉へ影響し

ていると判断されるた。本件の場合、影響による水位低下も問題だが、温度が低下すると加温の必要が生じるため、低温化がより深刻な問題となった。また、揚湯試験期間中における影響は拡大を続け、申請源泉の揚湯時間に伴い水位低下傾向、温度低下傾向が継続している。短期間の調査では安定しないため、この揚湯量での影響量はが十分に把握できていない。このようなことから、既存源泉に影響を与えない、もしくは許容できる範囲に収まる申請源泉の採取可能量を調べるために、より長期間の影響調査が必要とされ、本調査による揚湯試験に伴う影響調査の後に、再度長期の影響、影響調査が実施されている。

再調査における具体的内容は、申請源泉の揚湯量を大幅に制限し、かつ段階的(150L/分, 50L/分)に変化させて、揚湯量と影響量の関係についての調査を実施している。影響量を確認するには、既存源泉の影響による変動状況が収まり安定するまで、より長期の調査モニタリングが必要となり調査は 3週間一ヶ月以上行われることとなった。なお、再調査にあたっては既存源泉の温泉採取量（揚湯量）も観測を行うこととし、再調査期間中は、間欠揚湯をせず、連続揚湯で一定量に保つように調整がなされ、正確な影響量の把握に努めているた。その後、再調査結果に基づき申請源泉の揚湯量の調整が行われている。

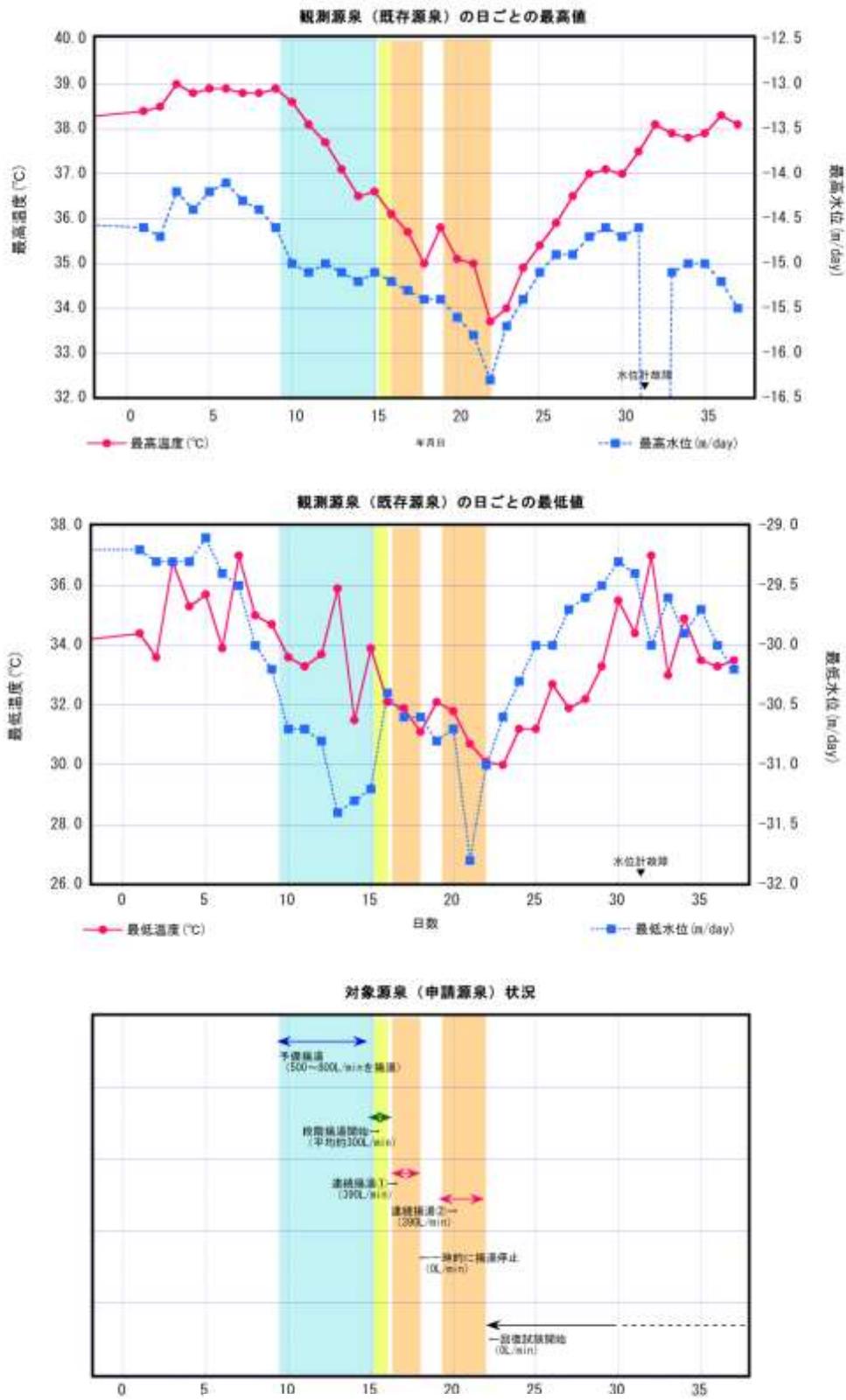
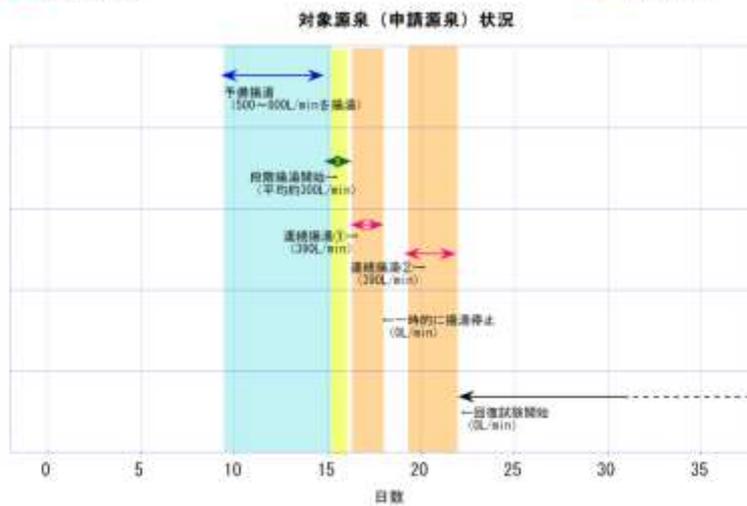
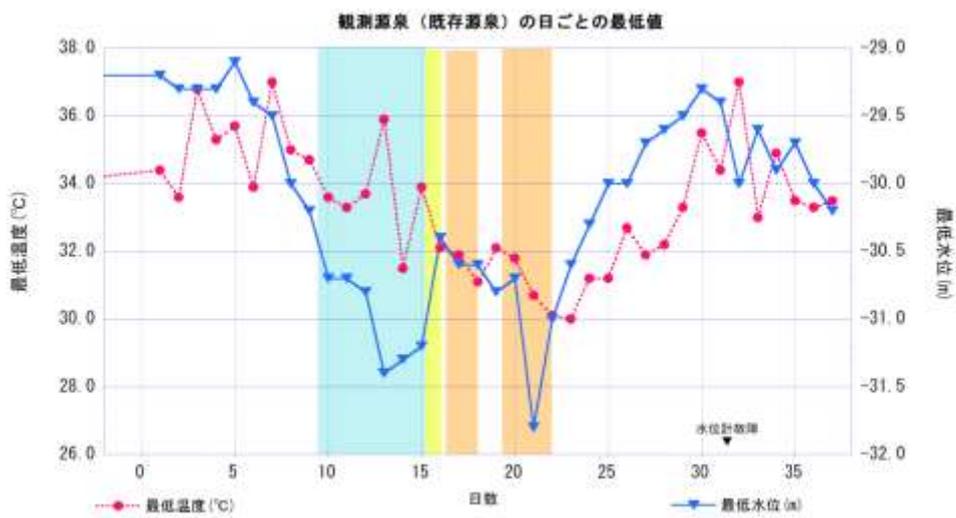
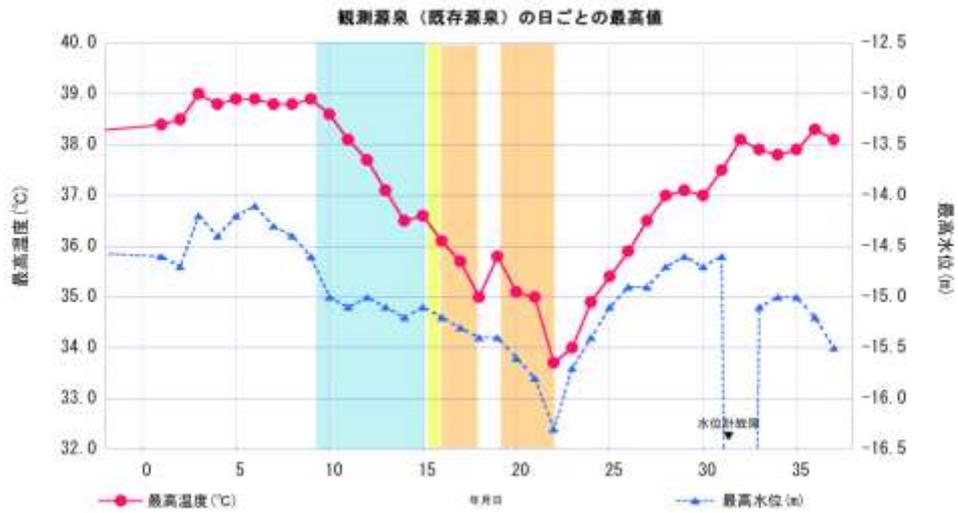


図5 揚湯試験に伴う影響調査



温泉モニタリング実施手法

I 自動観測

1. 観測源泉の選定

自動観測における観測機器の具体例は、次のとおりである（別紙5の「I 影響調査 3. 測定に使用する機器 3-1 機器による測定」に記した機器と基本的に同一である）。

測定項目	主な機種等	規格
温泉水位	圧力式等	±0.1% FS（フルスケール）程度
湧出量	電磁式等	±2%指示値
孔口圧力	圧力発信器等	測定精度±1% FS
温度	測温抵抗体等	分解能 0.1℃
記録方式	アナログ記録、デジタル記録、表示値の読み取り等	連続記録、定時での記録

これら表示器・記録計の配置例を図1に示すので参考とされたい。なお、配置例において、流量計・温度計の前後にバイパス管を配置したのは、機材のメンテナンスや交換が容易に行えるように留意したものであり（図2）、また、バイパス管にドレーンを設けたのは、この形式であれば通常状態時にはバイパス管に水が滞留するので、排除するためである。排除する必要性がなかったり、小さかったりする場合は、バイパス管やバイパス管ドレーンの設置は必要ない。

流量計の下流側（図の右側）には湧出量測定・温泉採取用の吐き出し管を設けており、これは、できるだけ源泉に近い所で温泉を採取できるようにすることと、実測して流量計の指示値を確認できるようにする二つの目的がある（図3）。

自動記録方式には、大きく分けるとアナログ記録（いわゆるペン式又は打点式レコーダーによる）とデジタル記録（自動記録計又はパソコン管理）があり、両者の特徴を併せ持つハイブリッド式の記録計もある。

アナログ記録は連続的な波形記録が行われ、あるイベントに対する変化が忠

実に再現される点がメリットだが、データ（記録紙~~＝チャート＝~~）の読み取りが必要な場合があることと、その管理が悪いと後からの資料整理に支障を来す点がデメリットである。ペン式又は打点式レコーダーによる記録間隔は、記録紙の送り速度~~（チャートスピード）~~によって決められる。

デジタル記録は記録間隔が任意に決められ、データをパソコンに直接取り込むこともでき、データの管理も容易である。しかし、データの記録間隔よりも短い時間単位での変化は記録されないのがデメリットとなる。

記録間隔は、目的とする観測内容によって異なるが、標準的には1時間に1データの取得で充分であり、ある限られた期間において、細かい時間間隔で変化を把握したければ、さらに短い時間間隔でのデータ取得が可能であり、自動記録計やパソコンの記録容量、データ通信量等に余裕があれば、1分間隔での測定も十分に可能であるが、通常の観測であればその必要性は小さい。

2. 測定項目

a) 湧出量

湧出量の自動計測は、自動観測に対応した配管用の流量計（電磁流量計や超音波流量計等）による。

エアリフトによる源泉では、揚湯管内は空気と温泉との混合体となって、正確な流量が測定できない。そうした源泉では、温泉をタンク（気液分離槽）等に貯留していったん空気を抜き、そこからの配管（タンクからの送湯管）に流量計を設置するか、気液分離槽にノッチ箱の機能を持たせ、その溢流水深を自記水位計（圧力式、静電容量式その他、超音波式でも対応可能）で記録することになる。ただし、後者の場合には、水位測定値を流量に換算する演算機能が必要である。

可燃性天然ガスを含む温泉も、基本的にはエアリフト源泉と同様の処置が必要だが、可燃性天然ガスに対する所定の災害防止対策を施すことが求められる。

なお、スケールが生成しやすい温泉、腐食の激しい温泉、高温の温泉等では、このような観測機器は耐久性に乏しく、実用的ではないこともあるので注意が必要である。

b) 温度

温度の自動記録は、配管に温度センサー（測温抵抗体等）を設置して行う。後述する水位計には、測温機能が付帯されているものもあり、そうした水位計を用いていれば、地上部に温度センサーを配置する必要性はあえてない。ただし、測温機能付き水位計は、設置場所によっては湧出温度とは異なる温度を測定してしまう場合があるので、注意が必要である。

c) 水位・孔口圧力

水位の測定機器には、センサーを水中に浸すことなく測定する機器（上記した超音波式等の隔測式水位計）がある。ノッチ箱で水位測定する場合や、自然湧出泉等で広い水面を持ち、地表から水面までの深さが浅い場合には、このような隔測式水位計も適用可能である。

しかし、一般の源泉は口径が細く、温泉水位も深いために、隔測式水位計は使用できないことが多い。一般的な源泉では、圧力式等のセンサーを水没させる機器を用いる。設置深度が深い場合、センサーを後から挿入することは容易ではなく、通常はポンプ挿入時に水位センサーを揚湯管に拘束し、ポンプと同時に設置することになる。このため、センサーが故障した場合でも、それを交換するにはポンプの昇降作業が必要になる。また、温泉であるが故に、高温、ガスを含む、スケールが生成するといった特徴があり、これらが水位計の耐用を短くする。こうした温泉では、温泉水中に高価な機器が浸らない気泡式水位計を用いるのも一方法である。

なお、可燃性天然ガスを含む温泉では、例えばポンプ地上部で水位計のケーブルが通る部分に隙間ができると、そこからガスが地表に漏出する可能性があるため、所定の災害防止対策を施すことが求められる。

自噴源泉の場合の孔口圧力は、源泉孔口に圧力センサーを設置して自動観測化する。圧力計の選定に当たっては、当該源泉の最大圧力又は通常状態における圧力を考慮すべきである。

II 現地観測（観測員による観測）

1. 観測機器

現地観測における観測機器の具体例は、次のとおりである。これは別紙 5 の「I 影響調査 3. 測定に使用する機器 3-2 観測員による定時測定」に記した機器と基本的に同一であり、機器の指示値の読み取りであっても構わない。

測定項目	主な機種等	測定
温泉水位	触針式（ロープ式）等	1cm 単位以下で読み取り
湧出量	容積法、ノッチ法等	L/分単位で有効数字三桁程度
孔口圧力	ブルドン管式等（測定精度±1.6% FS 程度）	機器の指示値
温度	デジタル温度計等（分解能 0.1℃）と標準温度計の併用	0.1℃単位で現地測定
記録方式	—	現地測定・記録

※ 湧出量と温度を測定するために、源泉井戸近くに採取した温泉の全湧出量を吐き出すことのできるバイパス管を設置する必要がある。

※ 湧出量の実測が困難な場合は、現地の状況に応じて工夫する（例：タンクからの流出を止め、タンク内の水位上昇速度を測定して量に換算する等）

測定記録の間隔は、目的とする観測内容によって異なる。現地観測では自動観測よりも頻繁な測定はできないが、1日1回～週1回程度の測定を標準としたい。これが困難な場合であっても、月1回の測定頻度は確保すべきである。なお、測定は定時観測（毎回、ほぼ同一時刻で測定すること）、同一条件下（例えば、ポンプを自動運転している場合等では、ポンプの運転中か休止中かのいずれかに統一する）での測定を基本とする。また、高温の温泉や有害ガスを含む温泉では、専門機関に相談し、安全を確認した上で測定を行い、事故がないよう注意されたい。

2. 測定項目

a) 湧出量

現地での湧出量の測定方法は、容積法を主体とする。これは、吐出口を計測しやすい場所に設け容量既知の容器が満杯になるまで（あるいはある一定の容量に達するまで）の時間を計測し、【容量（L）÷時間（秒）×60（毎分への換算）】で湧出量を計算するものである。なお、測定ミスや湧出量の脈動

等に対処するため、測定は複数回行い、その平均値を採用すべきである。容積法による測定を行うためには、図 1~3 に示した吐き出し管が必要である。

こうした吐き出し管がない場合には、タンク流入部で測定したり、水道水等が混じらないようにして浴槽への流入口で測定したりするほかない。タンクからの流出を止め、タンク内の温泉の上昇速度から湧出量を求めることも可能だが、タンク容量（断面積）が正確に把握できていないと精度が落ちるので、注意が必要である。

蒸気量の測定に関しては、蒸気圧計や温度計、ガス流量計等を用いて計測する方法があるが、源泉の形状によっては、蒸気圧計やガス流量計を設置できない場合がある。自然噴気を温泉として利用している場合は、熱量や凝縮水の量を測定する等の対応が考えられる。いずれにせよ、危険を伴うので測定には専門機関への相談が必要である。

また、自動計測ではないが、現地指示又は遠隔指示による流量計を用いることも有用である。特に、温泉の採取が断続的である場合、上記の容積法では測定時間内の瞬間的な量しか把握できないことから、現地指示型であっても、積算機能がある流量計であれば、より実態に即した湧出量が把握できる。

ただし、スケールが生成しやすい温泉、腐食の激しい温泉等では、このような観測機器は耐久性に乏しく、実用的ではないこともある。実態に即した観測態勢を整えることが重要である。

b) 温度

温度の測定は、上記の吐き出し管があれば、デジタル型温度計や水銀温度計によって容易に測定できる。

c) 温泉水位・孔口圧力

高温、ガスを含む、スケールが生成するといった源泉で、水位計の耐用が難しい温泉では、触針式（ロープ式）水位計によって、地上部から温泉水位を測定する。源泉孔内には動力ケーブル等があり、水位計のスムーズな挿入を困難とするので、水位測定用の小口径のパイプを、水中ポンプ挿入時に同時設置することが必要である。源泉孔内にスペースが無ければ、あらかじめエアチューブを源泉に設置しておき、チューブから空気を送りその圧力から

コメント [事務局1]: パブリックコメント
蒸気測定法について追加すべき
(対応)
蒸気測定法について追記しました。

水位に換算する方法もある。

なお、可燃性天然ガスを含む温泉では、ポンプ地上部で水位測定管を通して可燃性天然ガスが地表に漏出する可能性や空気を源泉井戸孔内に送ることとなるので、所定の災害防止対策を施すことが求められる。

自噴源泉の場合の孔口圧力は、源泉孔口に圧力計（ブルドン管式等）を設置して、その指示値を記録することとする。圧力計の選定に当たっては、当該源泉の最大圧力もしくは通常状態における圧力を考慮すべきである。

通常状態

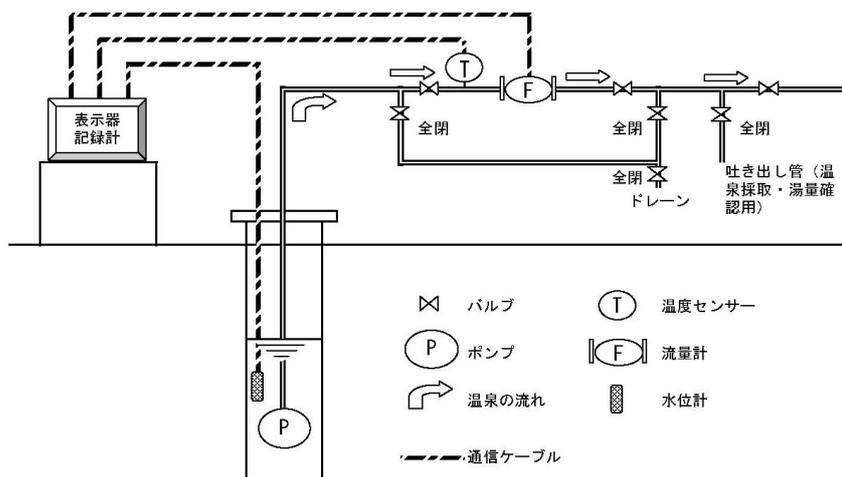


図1 観測機器設置事例（通常状態）

長期モニタリング事例

I 大深度掘削泉での事例

1. 調査の概要

当該源泉は掘削深度 1500m、水中ポンプ利用の掘削揚湯泉である。約 1100m 離れた場所に自然湧出泉が分布することから、温度泉温、揚湯量、水位の項目について自動観測機器を用いた長期の詳細モニタリングによる資源動向の監視が実施されている。

2. モニタリング調査結果

当初の揚湯試験結果により、400L/分程度の温泉が適正揚湯量と判断されていたが、同地域の揚湯量規制の上限 200L/分に制限して、かつインバーター制御による揚湯利用が行われていた。しかし、かなり余裕をもった揚湯利用が行われていたにも拘わらず関わらず、水位の経年的な低下傾向が現れ継続したため、掘削から 6 年経過した 2012 年 7 月から平均 160L/分程度に減量調整を行った。その後、水位は回復傾向に転じ、安定することとなった（図 1）。

また、この源泉では大深度掘削泉では珍しく降雨に伴う水位変動がモニタリングにより確認されている。

温泉モニタリングを実施していたことで、掘削当初の揚湯試験結果からは想定されなかった温泉水位の低下傾向が明らかとなり、揚湯量を抑えることで地域の資源保護が可能となった。なお、当該源泉では引き続きモニタリング調査が実施されており、周辺の既存源泉へのには影響は確認されていない。

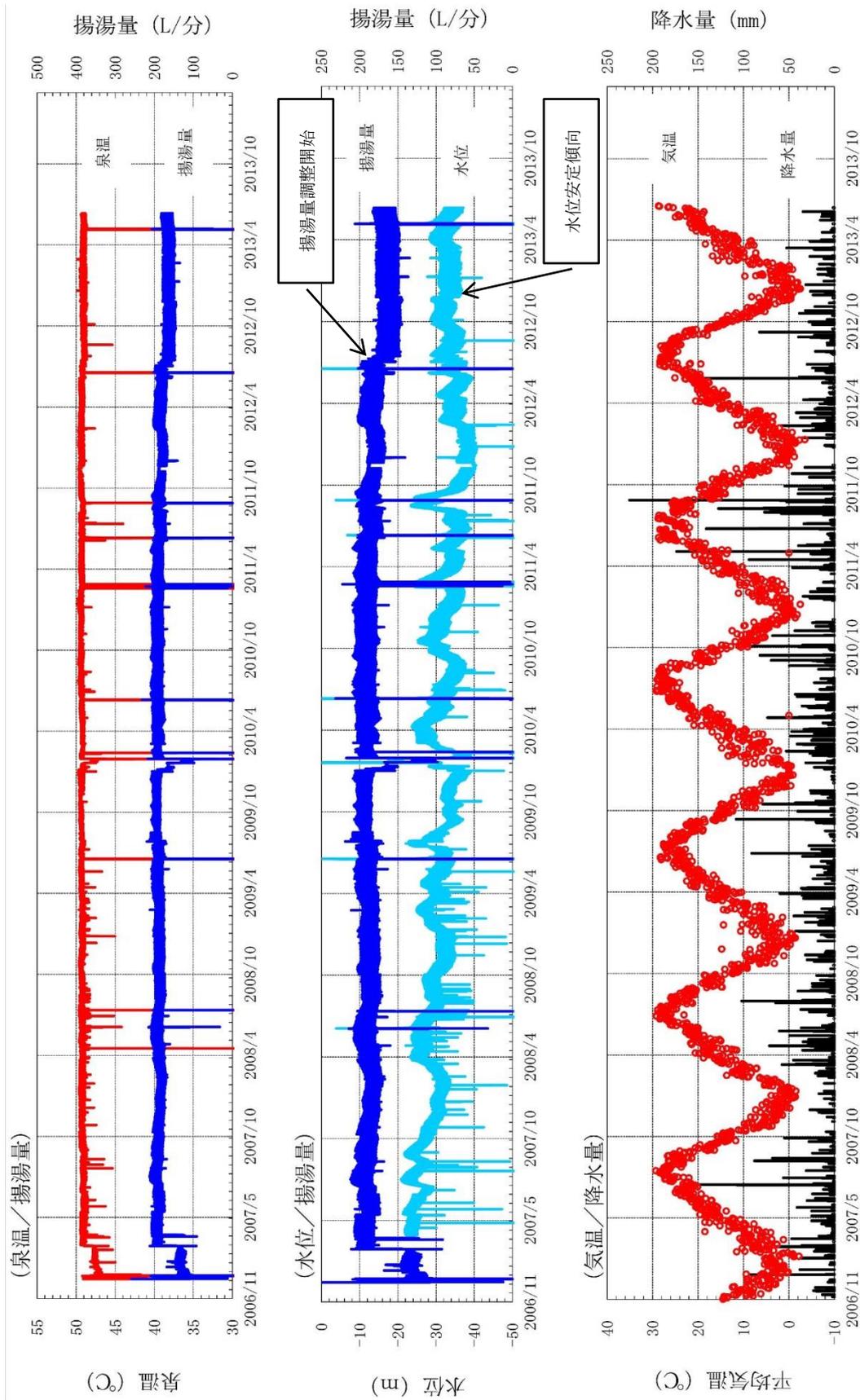


図1 大深度掘削泉における長期モニタリング

水質基準基準について

1. 水質汚濁に係る環境基準について(昭和 46 年 12 月 28 日 環境庁告示第 59 号)

最終改正：平成 25 年 3 月 27 日環境省告示 30 号

別表 1 人の健康の保護に関する環境基準より一部抜粋

項目	基準値
カドミウム	0.003mg/L 以下
全シアン	検出されないこと。
鉛	0.01mg/L 以下
六価クロム	0.05mg/L 以下
砒素	0.01mg/L 以下
総水銀	0.0005mg/L 以下
アルキル水銀	検出されないこと。
PCB	検出されないこと。
ジクロロメタン	0.02mg/L 以下
四塩化炭素	0.002mg/L 以下
1,2-ジクロロエタン	0.004mg/L 以下
1,1-ジクロロエチレン	0.1mg/L 以下
シス-1,2-ジクロロエチレン	0.04mg/L 以下
1,1,1-トリクロロエタン	1mg/L 以下
1,1,2-トリクロロエタン	0.006mg/L 以下
トリクロロエチレン	0.03mg/L 以下
テトラクロロエチレン	0.01mg/L 以下
1,3-ジクロロプロペン	0.002mg/L 以下
チウラム	0.006mg/L 以下
シマジン	0.003mg/L 以下
チオベンカルブ	0.02mg/L 以下
ベンゼン	0.01mg/L 以下
セレン	0.01mg/L 以下
硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素	10mg/L 以下

ふっ素	0.8mg/L 以下
ほう素	1mg/L 以下
1, 4-ジオキサン	0.05mg/L 以下

備考

- 1 基準値は年間平均値とする。ただし、全シアンに係る基準値については、最高値とする。
- 2 「検出されないこと」とは、測定方法の項に掲げる方法により測定した場合において、その結果が当該方法の定量限界を下回ることをいう。別表2において同じ。
- 3 海域については、ふっ素及びほう素の基準値は適用しない。
- 4 硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素の濃度は、規格 43.2.1、43.2.3 又は 43.2.5 により測定された硝酸イオンの濃度に換算係数 0.2259 を乗じたものと規格 43.1 により測定された亜硝酸イオンの濃度に換算係数 0.3045 を乗じたものの和とする。

2. 水質基準に関する省令（平成 15 年 5 月 30 日厚生労働省令第 101 号）

最終改正：平成 23 年 1 月 28 日厚生労働省令第 11 号より抜粋
水道法（昭和 32 年法律第 177 号）第 4 条第 2 項の規定に基づき、水質基準に関する省令を次のように定める。

項目名		基準値
1	一般細菌	1mL の検水で形成される集落数が 100 以下であること。
2	大腸菌	検出されないこと。
3	カドミウム及びその化合物	カドミウムの量に関して、0.003mg/L 以下であること。
4	水銀及びその化合物	水銀の量に関して、0.0005mg/L 以下であること。
5	セレン及びその化合物	セレンの量に関して、0.01mg/L 以下であること。
6	鉛及びその化合物	鉛の量に関して、0.01mg/L 以下であること。
7	ヒ素及びその化合物	ヒ素の量に関して、0.01mg/L 以下であること。
8	六価クロム化合物	六価クロムの量に関して、0.05mg/L 以下であること。
9	シアン化物イオン及び塩化シアン	シアンの量に関して、0.01mg/L 以下であること。
10	硝酸態窒素及び亜硝酸態窒素	10mg/L 以下であること。
11	フッ素及びその化合物	フッ素の量に関して、0.8mg/L 以下であること。
12	ホウ素及びその化合物	ホウ素の量に関して、1.0mg/L 以下であること。
13	四塩化炭素	0.002mg/L 以下であること。
14	1,4-ジオキサン	0.05mg/L 以下であること。
15	シス-1,2-ジクロロエチレン及び 1,2-ジクロロエチレン	0.04mg/L 以下であること。
16	ジクロロメタン	0.02mg/L 以下であること。
17	テトラクロロエチレン	0.01mg/L 以下であること。
18	トリクロロエチレン	0.01mg/L 以下であること。
19	ベンゼン	0.01mg/L 以下であること。
20	塩素酸	0.6mg/L 以下であること。
21	クロロ酢酸	0.02mg/L 以下であること。
22	クロロホルム	0.06mg/L 以下であること。
23	ジクロロ酢酸	0.04mg/L 以下であること。
24	ジブromokロロメタン	0.1mg/L 以下であること。
25	臭素酸	0.01mg/L 以下であること。
26	総トリハロメタン(クロロホルム、ジブromokロロメタン、ブromokジクロロメタン及びブromokホルムのそれぞれの濃度の総和)	0.1mg/L 以下であること。
27	トリクロロ酢酸	0.2mg/L 以下であること。
28	ブromokジクロロメタン	0.03mg/L 以下であること。
29	ブromokホルム	0.09mg/L 以下であること。
30	ホルムアルデヒド	0.08mg/L 以下であること。

31 以降、次項

項目名		基準値
31	亜鉛及びその化合物	亜鉛の量に関して、1.0mg/L 以下であること。
32	アルミニウム及びその化合物	アルミニウムの量に関して、0.2mg/L 以下であること。
33	鉄及びその化合物	鉄の量に関して、0.3mg/L 以下であること。
34	銅及びその化合物	銅の量に関して、1.0mg/L 以下であること。
35	ナトリウム及びその化合物	ナトリウムの量に関して、200mg/L 以下であること。
36	マンガン及びその化合物	マンガンの量に関して、0.05mg/L 以下であること。
37	塩化物イオン	200mg/L 以下であること。
38	カルシウム、マグネシウム等(硬度)	300mg/L 以下であること。
39	蒸発残留物	500mg/L 以下であること。
40	陰イオン界面活性剤	0.2mg/L 以下であること。
41	(4S,4aS,8aR)-オクタヒドロ-4,8a-ジメチルナフタレン-4a(2H)-オール (別名ジェオスミン)	0.00001mg/L 以下であること。
42	1,2,7,7,-テトラメチルビシクロ[2.2.1]ヘプタン-2-オール (別名 2-メチルイソボルネオール)	0.00001mg/L 以下であること。
43	非イオン界面活性剤	0.02mg/L 以下であること。
44	フェノール類	フェノールの量に換算して、0.005mg/L 以下であること。
45	有機物等(全有機炭素(TOC)の量)	3mg/L 以下であること。
46	pH 値	5.8 以上 8.6 以下であること。
47	味	異常でないこと。
48	臭気	異常でないこと。
49	色度	5 度以下であること。
50	濁度	2 度以下であること。

3. 農業用水基準

(昭和 45 年農林省公害研究会作成：農業農村整備事業計画研究会編、農業農村整備事業計画作成便覧より表：「農業（水稲）用水基準」及び文章：「本基準の取扱い」を抜粋、表については加筆を行った。)

「本基準の取扱い」

農業（水稲）用水基準は、公害対策基本法第 9 条の環境基準策定時に、基礎資料とするため当時の各種調査成績に基づく科学的判断から、昭和 45 年 5 月農林省公害研究会（会長技術審議官（現技術総括審議官））が学識経験者、研究者等の協力を得て作成したものである。

したがって、法令に基づく環境基準と同列には位置づけられないものの、本基準の内容、作成時の検討経過等は環境基準に反映されており、農政の展開の場においては環境基準とともに準拠すべき基本的要件の 1 つとなっている。

農業（水稲）用水基準

項目	基準値
pH(水素イオン濃度)	6.0～7.5
COD(化学的酸素要求量)	6mg/L 以下
SS(無機浮遊物質)	100mg/L 以下
DO(溶存酸素)	5mg/L 以下
T-N(全窒素濃度)	1mg/L 以下
EC(電気伝導度)*	0.3mS/cm 以下
As(砒素)	0.05mg/L 以下
Zn(亜鉛)	0.5mg/L 以下
Cu(銅)	0.02mg/L 以下

*：現在 EC については「電気伝導率」という呼び方が一般的で、単位についても[S/m]が使われることが一般的である。0.3mS/cm は、30mS/m に相当する。

沖縄県宮古島市における塩化物イオン濃度の上昇に係る原因究明調査事例 (平成19年度宮古島市地下水保全対策学術委員会報告書より抜粋)

1.2 調査・研究の目的および方針

1.2.1 目的

宮古島最大の水道水源となっている白川田流域において、2004年8月より認められている地下水中の塩化物イオン濃度上昇の原因解明とその対策方針について調査・検討を行うことを目的とする。

1.2.2 原因究明の方針

上記目的、および既存資料整理の結果を受けて、当地の水理地質的特徴及び地下水質から原因究明の方針を3つに定め、それぞれの方針に対する調査・解析を以下のように設定した。

【第1】更竹地区に負荷された塩化物イオンが、白川田水源等の水源地に、最終的に到達するか否か。

- ① 地下水流動に関する調査
既存資料整理調査
井戸台帳作成調査、水露頭調査
地表地質踏査調査、水露頭調査
土壌塩化物イオン含有量調査
ポーリング調査 (現場透水試験、伝導率測定、自記計設置)
定期地下水水位観測調査

【第2】塩化物イオン濃度が上昇した2003年8月以降に白川田流域の地下水質がどのように変化したかを解析すること。

- ② 地下水イオン組成・濃度に関する調査
- ③ 地下水同位体に関する調査

【第3】白川田流域に負荷される塩化物イオンの起源と各起源の寄与度をできるだけ精度よく推定すること。

- ④ 大気・降水由来の塩化物イオン濃度に関する調査
大気中塩化物イオン量調査
降水量調査
- ⑤ 原単位に関する調査
既存資料による肥料等使用量調査
土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査
- ⑥ 温泉排水に関する調査
井戸構造、湧水量および揚水量等に関する資料収集調査
温泉の水質・同位体調査
- ⑦ 地下水イオン混合による影響度解析
- ⑧ マグネシウムイオン・塩化物イオン相関による影響度・寄与率解析
- ⑨ 塩素安定同位体比による寄与率解析

⑩ 原単位による起源別負荷および寄与率解析
⑪ 統計解析による寄与率解析

表 1.2.1 に、本検討で実施した調査項目および数量一覧を示す。

表 1.2.1 調査項目一覧

項目	数量
① 地下水流動に関する調査	
既存資料整理調査	1式
井戸台帳作成調査 (水準測量含む)	85箇所
地表地質踏査調査、水露頭調査	1.5km ² (更竹付近)
土壌塩化物イオン含有量調査	8試料
ポーリング調査	3箇所
現場透水試験、電気伝導率測定	5深度
自記計 (水位、EC) 設置	3箇所
定期地下水水位観測	37~38箇所/月1回、計12回
② 地下水イオン組成・濃度に関する調査	
モニタリング (井戸等)	30~31箇所/月1回、計12回
モニタリング (海水)	1箇所
③ 地下水同位体に関する調査	
地下水中の塩素安定同位体比・放射性トリチウム	23検体
化学肥料の塩素安定同位体比	1検体
④ 大気・降水由来の塩化物イオン濃度に関する調査	
大気中塩化物イオン量調査	6箇所
降水量調査	1箇所
⑤ 原単位に関する調査	
既存資料による肥料等使用量調査	1式
土地利用実態調査及び原単位塩素負荷量調査	白川田流域
⑥ 温泉排水に関する調査	
井戸構造、湧水量等資料収集	1式
温泉の水質、同位体調査	1式
⑦ 地下水イオン混合による影響度解析	1式
⑧ マグネシウム・塩化物イオン相関による影響度・寄与率解析	1式
⑨ 塩素安定同位体比による寄与率解析	1式
⑩ 原単位による起源別負荷および寄与率解析	1式
⑪ 統計解析による寄与率解析	1式

6.3 総 論

宮古島において大半の水道原水が採取される最も重要な地下水流域である白川田流域では、2003年10月以降、地下水の塩化物イオン濃度が顕著に上昇してきていることが認められている。本報告は、その原因を究明することを目的とした平成18および19年度の調査・研究成果をまとめたものである。ここでは、本成果の集約として、総合的な結論を示す。なお、結論を導き出す視点として、白川田流域における地下水流動方向とイオン組成の特徴および塩化物イオンの起源別寄与率推定に関する調査・研究結果に焦点を当てた。

6.3.1 白川田流域の地下水流動

白川田流域内の地下水は、同流域における定期的な地下水位測定結果および水理地質構造から判断すると、最終的に流域北東部の湧水口、すなわち白川田水源およびその近辺に収束され流出していることが確認された。従って、更竹地区において浸透した水も、南東―北西方向に形成された不透水性基盤の凹状の溝に沿い、地下水としてI-64(C井戸)、高野水源、大野水源を経て白川田水源方向に向かうことが確認された。【6.1 白川田流域における地下水流動 参照】(図6.3.1)。

6.3.2 白川田流域の地下水イオン組成

白川田流域内の地下水観測孔および東浜水道水源における地下水のイオン組成、ならびに温泉原水とその排水のイオン組成を調べた。その結果、地下水塩化物イオンが高濃度を示す更竹地区のI-64(C井戸)等の地下水は、温泉原水とその排水に特徴的に含まれるホウ酸イオンと臭化物イオンを含有しているなど、流域外の地点の地下水イオン組成と比べて明らかに異なった。【5.1.3 イオン組成解析、5.1.4 天然ガス付随水のイオン組成 参照】
温泉排水前(2002年10月)の白川田水源の地下水に、温泉排水を混合した場合に構成される水質に関するシミュレーションを行った。その結果、温泉排水を温泉排水前の白川田水源地下水で10倍希釈すると2004年12月時点のI-64(C井戸)の地下水イオン組成に酷似した。同様に20倍希釈すると2006年11月時点のI井戸の地下水イオン組成に、50倍希釈すると2004年12月時点のI井戸と2006年11月時点のI-60の地下水イオン組成に酷似した。【5.1.5 地下水イオン混合解析 参照】

白川田流域地下水の塩化物イオン濃度上昇における海水由来と温泉排水由来の塩化物イオンの寄与度を検討するため、マグネシウムイオン(海水の濃度が温泉排水よりも10倍以上高い)に着目し、地下水の塩化物イオン濃度とマグネシウムイオン濃度との関係(Mg²⁺/Cl⁻濃度比)と、その経時の変化を調べた。その結果、I-64(C井戸)、I-38(I井戸)、高野水源、大野水源の地下水におけるMg²⁺/Cl⁻濃度比は、塩化物イオン濃度が高い時期ほど、温泉排水時期以前における白川田水源地下水の原型的な水質と温泉排水とが混合した場合に形成されるMg²⁺/Cl⁻濃度比に相似した。【5.1.6 マグネシウムイオン・塩化物イオン濃度相関法 参照】

また、地下水塩化物イオン濃度を上昇させる原因として、台風が陸上にもたらす海水起

源の塩化物イオンが考えられるため、白川田流域内の高野水源と大野水源を対象に、流域外の海岸に近い湧水の塩化物イオン濃度を比較した。その結果、2003年9月の台風14号が直撃した以降、高野水源・大野水源の塩化物イオン濃度最高値は、より海岸に近い山川湧水(ウブカー)、新成湧水および保良ガーの最高値より高かった。

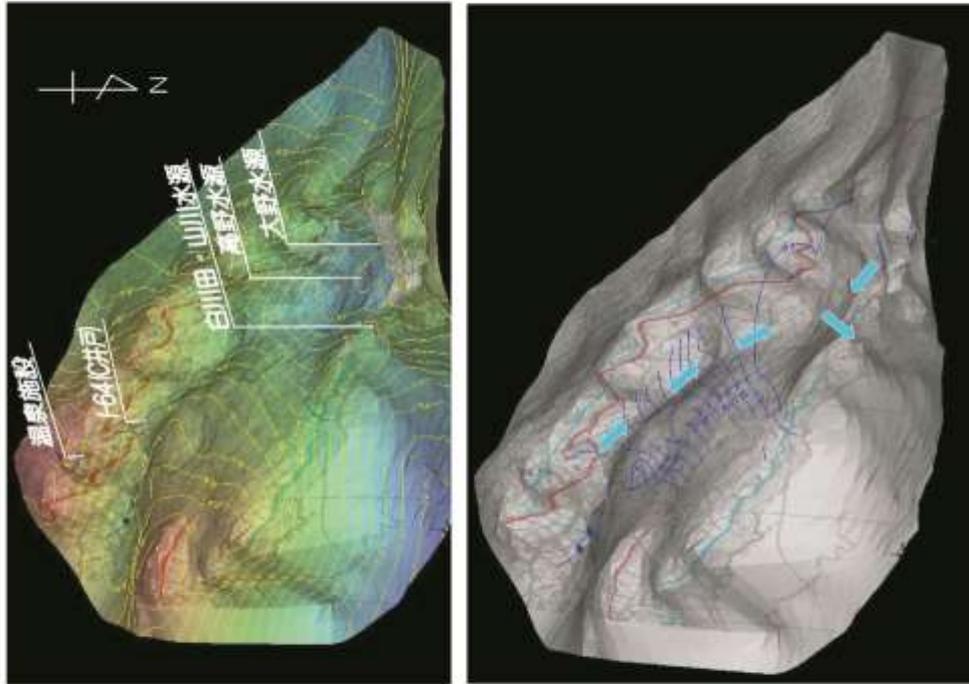


図 6.3.1 白川田流域の不透水性基盤上面コンター(上図)と平常時(2006年2月)における地下水コンター(下図)

注：標高方向は20倍に強調して示した。また、青矢印は地下水の流動方向を示す。

6.3.3 白川田流域地下水の塩化物イオンの起源別寄与率

塩素安定同位体比法および $\text{Mg}^{2+}/\text{Cl}^-$ 濃度相関法を用い、I-64(C 井戸)における地下水の塩化物イオン起源別寄与率を推定した。その結果、2006 年を対象とすると、温泉排水の寄与率は前者で 97.3%、後者で 92.1%以上（一部は台風等で負荷された分も含む）と、同地点の地下水中塩化物イオンの大半が温泉排水に由来すると推定された。

原単位法を用い、白川田流域全域を対象とした 2005 年当時における地下水塩化物イオンの起源別寄与率を推定した。その結果、1 日に 92.85m^3 、304 日間(2004 年 7 月～2005 年 4 月)、温泉施設から更竹地区に排水されたとした場合、白川田流域に負荷された塩化物イオン年間量の寄与率は、温泉排水由来が 39.9%、大気・降水由来が 47.4%、その他(肥料・生活排水・家畜ふん尿)由来が 12.8%と推定された。また同様に、温泉施設からの排水量が $30\text{m}^3/\text{日}$ (排水期間は同じく 304 日間)であった場合の推定結果は、それぞれ 17.6%、64.9%および 17.5%であった【5.3 原単位法による塩化物イオンの起源別負荷量 参照】。

統計解析手法を用い、白川田水源地下水を対象とした 2005 年当時の地下水塩化物イオンの起源別寄与率を算出した。その結果、温泉排水由来が 17%、大気・降水由来のうち台風影響による上昇分が 30%、その他(平常降雨・肥料・生活排水・家畜ふん尿)由来が 53%となった。この結果を用い、白川田水源における地下水塩化物イオン濃度の年平均値(2005 年、 67.8mg/L)の内訳を求めると、温泉排水由来が 11.5mg/L 、大気・降水由来のうち台風影響による上昇分が 20.3mg/L 、その他(平常降雨・肥料・生活排水・家畜ふん尿)由来が 36.0mg/L となった。同様に、2006 年(年平均値 88.2mg/L)を対象とした推定結果は、それぞれ 40% (35.8mg/L)、21% (17.6mg/L) および 39% (34.8mg/L) で、2005 年に比べ 2006 年における温泉排水の寄与率が高かった【5.4 統計解析法 参照】。

6.3.4 白川田流域における地下水塩化物イオン濃度の上昇原因に関する総合的考察

台風の常襲する小さな島嶼で、沿岸に位置する白川田流域のような地域の地下水に含まれる塩化物イオン濃度が異常に上昇した場合は、その原因は通常、台風により陸域へもたらされた海水に帰されるであろうことは容易に推測できる。事実、近年稀な勢力を有し、2003 年 9 月 11 日に宮古島を直撃した台風 14 号は、その後、宮古島の各地の地下水塩化物イオン濃度を上昇させた(第 1 の事実)。しかしながら一方で、本台風による影響が宮古島に生じたであろうと考えられる時期に重なり、白川田流域地下水の塩化物イオン濃度を上昇させる可能性を有する人為行為があったことも事実である。すなわち、海水の半分程の塩化物イオン濃度を含む温泉が掘削され、その排水が少なくとも 2003 年 10 月から 2005 年 4 月まで、白川田流域の南西端に位置する更竹地区に行われた(第 2 の事実)。そして第 3 の事実として、白川田流域地下水の塩化物イオン濃度は、2003 年 10 月以降、顕著な上昇を示してきている。

このような状況において、本委員会は、白川田流域地下水の塩化物イオン濃度上昇の原因を究明することを目的とした調査・研究を行ってきた。その主な命題は次の 3 点である。

第 1 は、更竹地区に負荷された塩化物イオンが宮古島の大半の水道原水を採水する白川田水源等の水源地に、最終的に到達するかどうかである。第 2 は、ここで問題とする時期、すなわち 2003 年 10 月以降において、白川田流域地下水の水質組成はどのように変化したかを解析することである。第 3 は、白川田流域に負荷される塩化物イオンの起源と各起源の寄与率をできるだけ精度良く推定することであり、簡潔には、台風影響と温泉排水影響の寄与率を求めることである。

その結果、第 1 の命題に関しては、上述の 6.3.1 でまとめを示したように、更竹地区において浸透した水は、最終的に白川田流域の水源地に到達することが確認された。したがって水溶された塩化物イオンも同様に、更竹地区から水源地に移動することは自明である。第 2 の命題に関しては、上述の 6.3.2 に示したように、温泉原水とその排水は硫酸イオンをほとんど含まず、また海水に比べマグネシウムイオン濃度がきわめて低いという特性を利用した解析の結果、温泉排水が行われた後の I-64 (C 井戸)の水質組成は、温泉排水を混合した場合に形成される水質組成に酷似することが判明した。この解析結果から、温泉排水に含まれる塩化物イオンが、I-64 (C 井戸)に混入し、その濃度を上昇させる一因になったと結論できる。

第 3 の命題に関しては、上述の 6.3.3 に示したように、4 つの手法を用い、起源別の塩化物イオン寄与率を推定した。その結果、温泉排水地点に近い C 井戸(地下水)への温泉排水の寄与率は 2004～2006 年において 90%を超えると考えられ、また同様に、白川田水源地の地下水への寄与率は、2006 年のおおよそ 20～40% (この数値の幅は、温泉排水量が正確に把握できないことに起因する)と推定された。

以上の結果から、近年における白川田流域地下水の塩化物イオン濃度の顕著な上昇に關し、温泉排水の影響は排水地点近傍の地下水に直接的に強い影響を受けたと判断された。この白川田水源地上における地下水塩化物イオン濃度への温泉排水の寄与率は、上述のように約 2～4 割であると推定され、排水地点近傍より温泉排水より希釈されるためと考えられる。これは、温泉排水地点が白川田流域の南西端上流域に位置するため、下流の水源地に至る過程で、流域の他地域から集まる地下水により希釈されるためと考えられる。

また、台風による塩化物イオンの負荷はいわゆる面源であるのに対し、温泉排水は点源である。このため、温泉排水地点における塩化物イオンの負荷は、水源地に至るまで、その距離に応じた時間差が生じることになる。事実、6.3.3 で示したように、統計解析法によると、白川田水源地下水に対する温泉排水由来塩化物イオンの寄与率は、温泉排水が行われた直後の 2005 年よりも 2006 年の方が高いと推定された。このことは、今回のような点源での地下水負荷の影響が、その直後に水源地に顕在化するとは限らないことを示している。したがって、水道水源地における地域層的な水質監視体制が必要であることもさる。ことながら、地域公共財産である水道原水を保全するため、人為的な負荷を極力生じさせないといったモラルを、全ての住民が堅持することの重要性を示したと考える。

動力装置許可の審査基準（東京都）

温泉動力の装置の許可に係る審査基準

平成10年 7月 1日（東京都告示第 724号）

最終改正 平成20年10月24日（東京都告示第1339号）

地盤沈下防止の観点から、温泉法(昭和23年法律第125号)第11条第3項により準用する同法第4条第1項の規定に基づく動力の装置の許可に係る審査基準を次のように定める。

	指定地域	吐出口断面積	一日の揚湯量
1	墨田区 江東区 北区 荒川区 板橋区 足立区 葛飾区 江戸川区	6平方センチメートル 以下	50立方メートル 以下
2	東京都の区域のうち、1に掲げる区域、八王子市の一部（一般国道411号線との交点以北の都道檜原あきる野線、その交点から一般国道20号線との交点（八王子市高尾町）までの都道八王子あきる野線、その交点から都道八王子町田線との交点までの一般国道20号線及びその交点以南の都道八王子町田線以西の区域）、青梅市、あきる野市、西多摩郡日の出町、同郡檜原村、同郡奥多摩町及び島しょ地区を除く区域	21平方センチメートル 以下	150立方メートル 以下

備考 揚湯の状況について、水量測定器及び水位計により確認できること。

揚湯試験事例

I 揚湯試験（集湯能力調査）事例（一般的な事例）

「別紙 5 II 5. 特殊な事例」で示した揚湯試験に関しては II 及び III のような事例が報告されている。特殊事例の紹介に先立ち、一般的な事例を紹介する。なお、段階揚湯試験では限界揚湯量を調査し、安全率をみてその何割かを適正揚湯量と設定する。その後、適正揚湯量を検証するために連続揚湯試験を実施し、過度な水位低下を招くことなく水位の安定を確認することが重要である。

1. 概要

本事例では、6 段階の段階揚湯試験を実施し、揚湯量 - 水位低下量の関係から限界揚湯量を求め、そこから適正揚湯量を設定している。次に設定した適正揚湯量で連続揚湯試験を実施し、その後回復試験で水位の回復状況の確認を行っている。

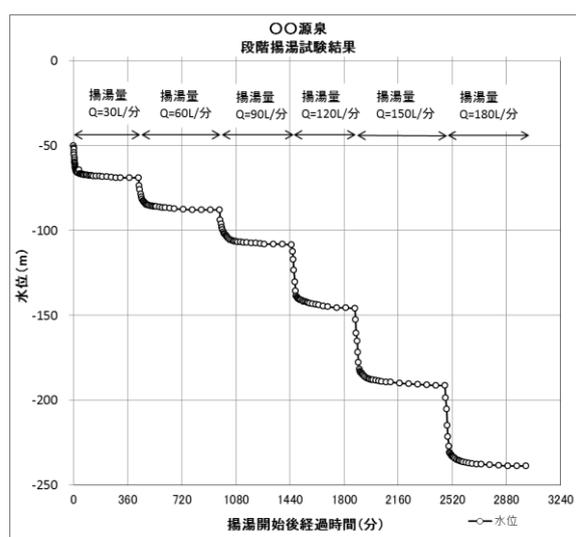


図 1 段階揚湯試験結果

図 1 における段階試験は、30L/分、60L/分、90L/分、120L/分、150L/分、180L/分として 6 段階で水位の測定を実施した。この結果を表 1 に、揚湯量 - 水位低下量の関係を図 2 に示す。（図中には対角線上に 45° 傾斜の線を記入している）。

表 1 段階試験結果

	揚湯量 Q (L/分)	水位 (m)	水位低下 Sw (m)
		-50.2	
1	30	-69.1	18.9
2	60	-87.9	37.7
3	90	-108.4	58.2
4	120	-145.8	95.6
5	150	-191.3	141.1
6	180	-238.9	188.7

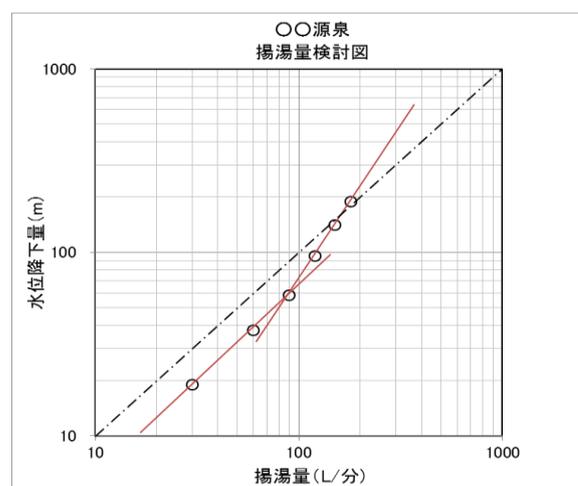


図 2 揚湯量-水位低下量の関係検討図

下図では、連続揚湯試験は、段階揚湯試験結果より求めた適正揚湯量 72L/分で実施し、その後回復試験状況を示す。

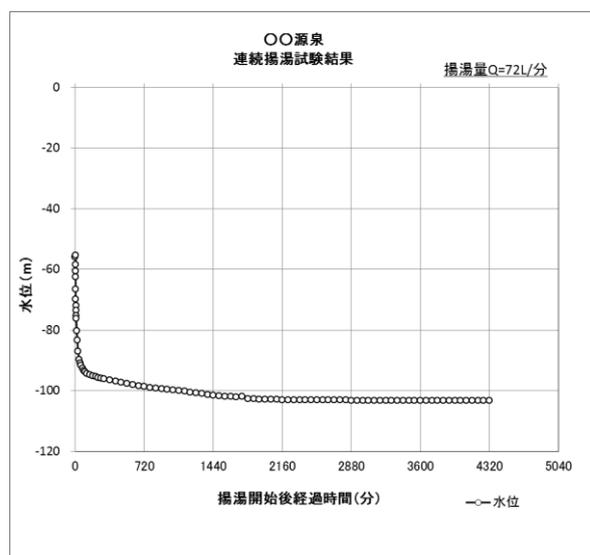


図3 連続揚湯試験結果

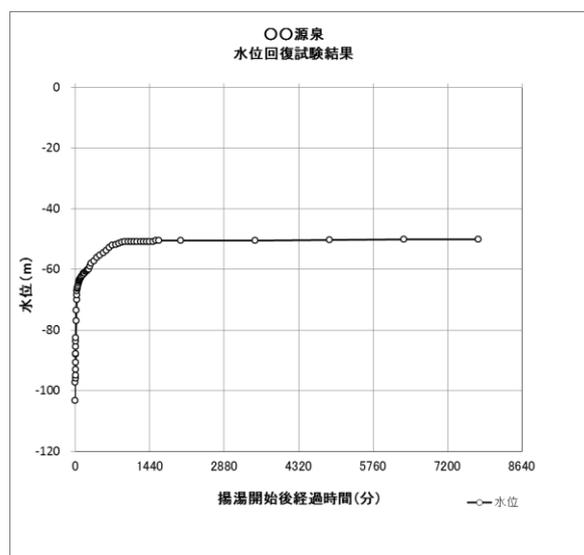


図4 回復試験結果

2. 揚湯試験の判断について

- ・ 図2 揚湯試験-水位低下量の関係検討図をみると、3段階目の 90L/分 で変曲点 が確認でき、限界揚湯量と判断し、この限界揚湯量の 80%である 72L/分を適正揚湯量と設定した。
- ・ 適正揚湯量 72L/分 で実施した連続揚湯試験においても、ほぼ 2 日 で安定水位が得られている。
- ・ 回復試験においても、ほぼ 2 日 で水位は回復し、試験前の静水位に戻ることが確認できた。

以上のことから、72L/分が適正揚湯量に相当すると判断される。

Ⅱ 揚湯試験特殊事例①（揚湯によって水位が上昇する場合）

1. 概要

本事例では、段階揚湯試験と連続揚湯試験実施時に水位が上昇する特殊な現象が報告されている。図5の段階揚湯試験結果をみると各段階の揚湯開始直後に一旦水位は低下するが、その後、上昇に転じる変化が認められる。

表2 段階揚湯試験結果（1回目）

	揚湯量 (L/分)	水位 (m)	最終 降下量 (m)	最大 降下量 (m)
	0	4.44		
1	21	4.58	0.14	0.33
2	30	4.61	0.17	0.30
3	39	4.698	0.254	0.33
4	45	4.71	0.27	0.34

表3 段階揚湯試験結果（2回目）

	揚湯量 (L/分)	水位 (m)	最終 降下量 (m)	最大 降下量 (m)
	0	4.36		
1	14	4.42	0.06	0.21
2	21	4.43	0.07	0.17
3	31	4.50	0.14	0.24
4	41	4.58	0.22	0.29
5	46	4.65	0.29	0.34

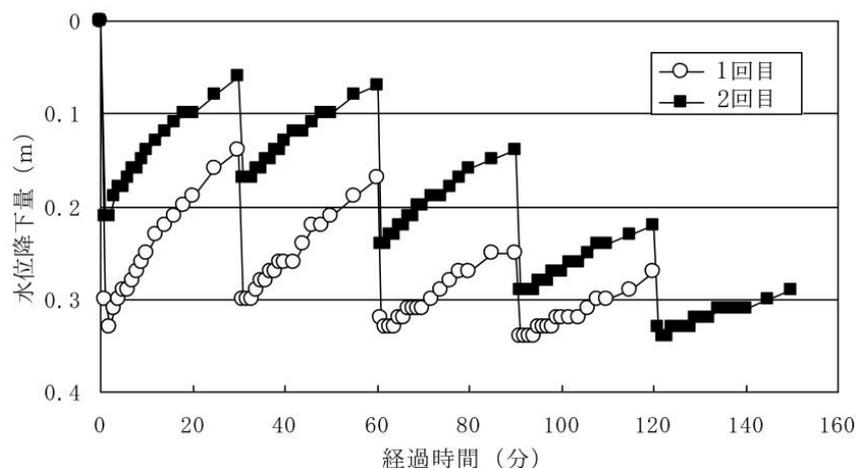


図5 段階揚湯試験結果

2. 揚湯試験の判断について

揚湯によって水位が上昇する源泉では、温泉付随ガスの増加や他の帯水層からの井戸孔内への流入、使用するポンプの問題等、様々な要因が原因と推定されている。

上記のような現象は湧出能力が高い源泉に多くみられ、通常の揚湯試験では解析が困難な場合もある。その場合、適正揚湯量が揚湯試験での設定揚湯量を上回っていることが考えられ、連続揚湯試験結果当該地域で設定された採取量の上限值や段階揚湯試験における最大揚湯量等からを限界揚湯量とみなす考え方等を用いて判断することももが考えられる。

Ⅲ 揚湯試験特殊事例②（湧出量が少なく、通常の揚湯試験実施が難しい場合）

1. 概要

水位低下が大きく揚湯可能量が極めて少ないため、連続揚湯が行えず、通常実施している段階揚湯試験と連続揚湯試験ができない事例である。また、間欠揚湯による揚湯試験後、試験用ポンプを変更し、さらに一部の温泉を温泉井戸内に戻すことで少量揚湯による段階試験が可能となり、再度試験を実施し適正揚湯量の再検証が行われ、同様の結論が得られている。

図6の間欠揚湯に伴う水位の変化は、期間①（30分オン、210分オフの繰り返し）では、最低水位、最高水位ともに上昇傾向にあった。期間②（60分オン、180分オフの繰り返し）では最低水位、最高水位ともにやや低下もしくはほぼ安定傾向を示した。このことから、期間①を適正揚湯量と判断している。

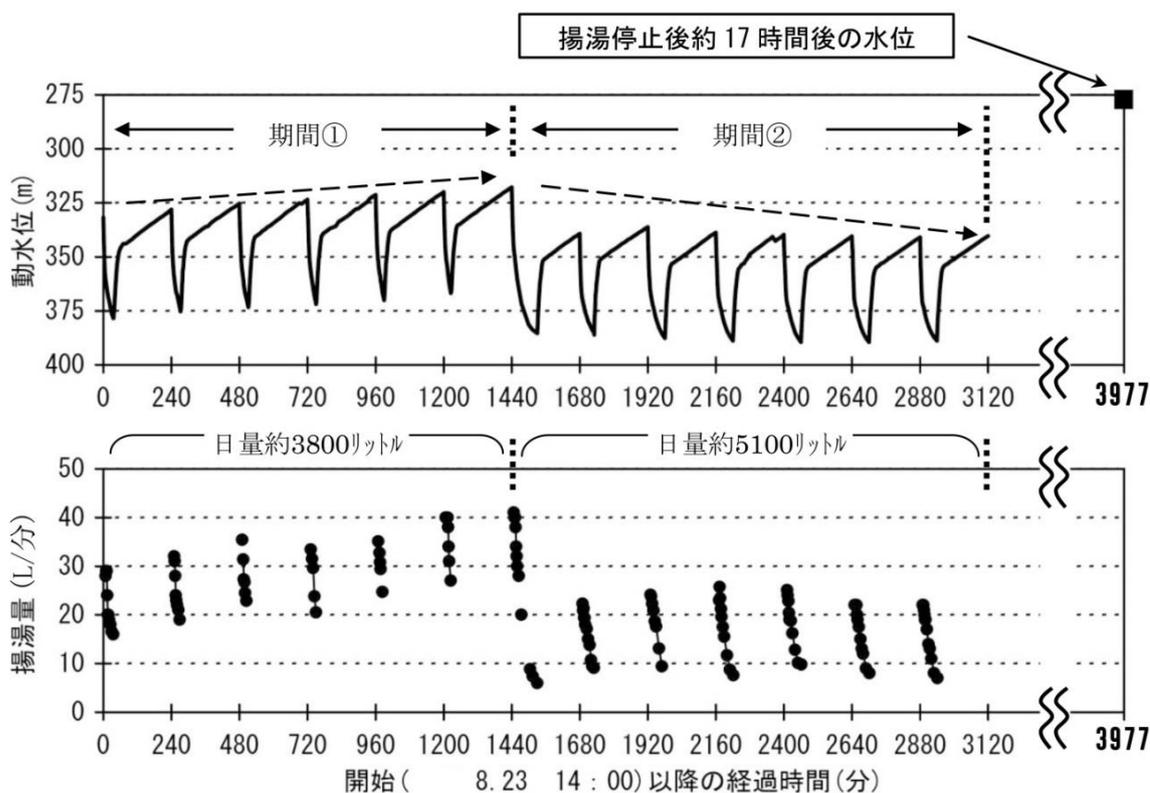


図6 水位と揚湯量の推移

図7の段階試験では、第1段階で4.8L/分、第2段階で3.9L/分、第3段階で2.9L/分と揚湯量を段階的に減じる方法で試験が行われ、段階揚湯試験の最大4.8L/分で405mまで大きく水位が低下している。また、最後に回復試験が行われているが、試験期間内に当初の静水位にまで回復はしていない。

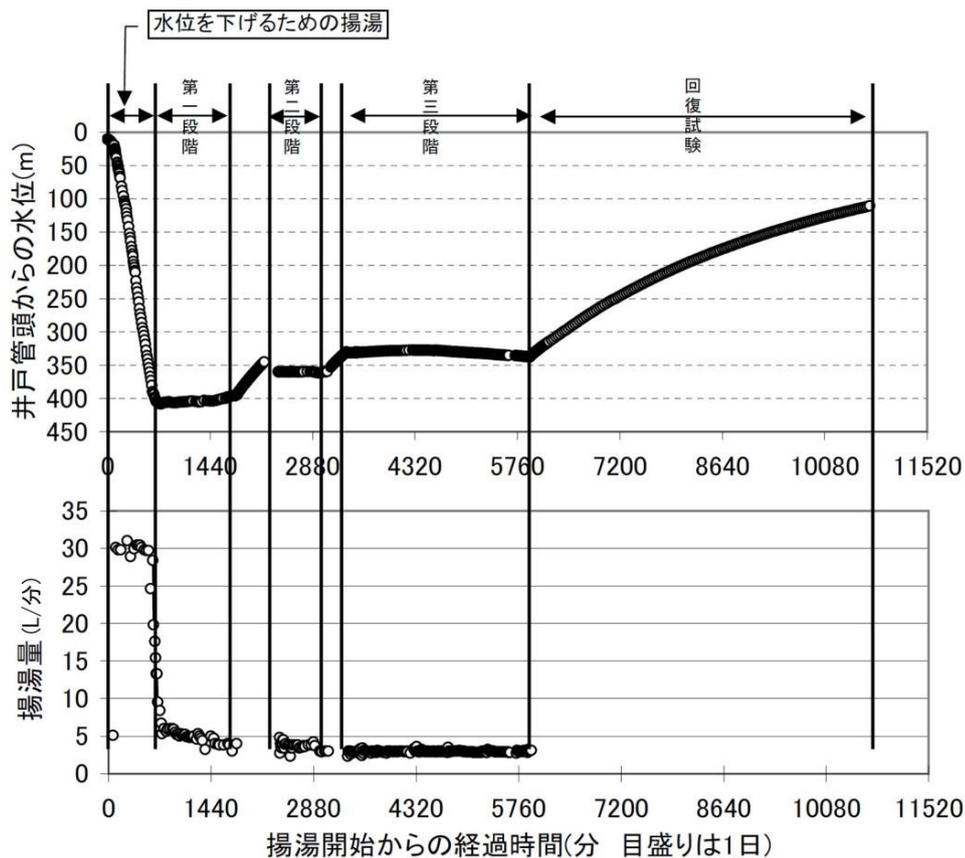


図7 段階揚湯試験結果図

2. 揚湯試験の判断について

揚湯可能量が非常に少ない源泉や水位降下量が大きく通常の揚湯試験が行えないような源泉では、何らかの方法で動水位の安定が可能な適正採取量を検討することも考えられる。それが、不可能な場合は回復試験結果を参考とし判断する等の方法が考えられる。このような場合で想定されうる対応例を以下に示す。

【対応例】

- ・ 揚湯試験実施に適し、かつ過度に水位低下を招かないポンプを選定して試験を実施する。
- ・ 一定間隔で間欠揚湯を繰り返し行い、水位の安定化を確認する。
- ・ ポンプの最低揚湯量を下回る場合、温泉の一部を温泉井戸内に戻して量の調整を行い段階揚湯試験、連続揚湯試験を実施する。
- ・ 回復試験を実施し、水位の回復速度から湧出量を推定する。

登録分析機関一覧

(平成25年7月12日現在)

別紙13

所在地	登録分析機関名	所在地	連絡先	登録年月日	登録番号
北海道	北海道立衛生研究所	札幌市北区19条通12丁目	011-747-2735	H14.4	北海道1号
北海道	(一財)北海道産業 食品衛生検査センター	札幌市豊平区平岸1条6丁目6-6	011-924-3448	H14.4	北海道第2号
北海道	(株)ホクレン 環境化学分析センター	旭川市永山14条3丁目3-4	0166-24-5593	H10.12.25	北海道第3号
北海道	(株)環境総合科学	苫小牧市豊川町2丁目1番2号	0144-75-2181	H10.2.1	北海道第4号
北海道	(株)環境科学研究所	国府市香積町25番地01	0138-48-6211	H10.2.1	北海道第5号
北海道	太平洋総合コンサルタント(株)	釧路市材木町15番5号	0154-41-2633	H10.10.3	北海道第6号
北海道	(株)環境プロジェクト	札幌市厚別区厚別西1条1丁目南10号	011-936-6210	H20.11.18	北海道第9号
北海道	(株)エコノミクス・ラボ	帯広市相生町70番地	0123-25-0012	H20.12.4	北海道第10号
北海道	日本製紙(株) 環境分析センター	札幌市道田区道田1条1丁目1番40号	011-888-0122	H20.12.9	北海道第11号
北海道	株式会社 日本製紙検査センター	苫小牧市日通町2丁目3番9号	0144-72-5712	H23.4.26	北海道第12号
青森県	(社)青森県環境衛生検査センター	青森市大字野水字山口194番43	017-762-2620	H14.8.1	青森県第2号
青森県	環境保全(株)	平川市松崎町341-10	0172-43-1100	H21.3.8	青森県第3号
岩手県	(一社)岩手県環境調査	盛岡市高橋町3-12	019-841-4401	H14.4.19	岩手県第1号
岩手県	岩手県環境検査センター	盛岡市高橋町1番地315-1	019-856-0966	H14.4.26	岩手県第2号
岩手県	地盤エンジニアリング(株)	岩手県滝沢市新田大字清水356番6	019-561-6000	H14.9.12	岩手県第3号
岩手県	(株)大塚環境科学 総合技術センター	岩手県久慈市大字宮内町19番205番地	019-506-2671	H19.4.12	岩手県第4号
岩手県	エスエス環境(株) 環境支店	盛岡市小川4-3-33	019-843-8911	H20.11.9	岩手県第5号
岩手県	(公財)岩手県公害衛生検査センター	仙台市青葉区塩釜2-15-24	023-351-1133	H14.4.4	岩手県第6号
岩手県	(一財)宮城県公害衛生協会	仙台市青葉区中野字草野下番地01	023-771-4722	H19.2.15	岩手県第7号
岩手県	エスエス環境(株) 東北支店	仙台市千秋区泉田6-6	023-254-4661	H19.10.9	岩手県第8号
秋田県	秋田県環境検査センター	秋田市中区北野字八幡191-42	018-932-9000	H14.4.17	秋田県第1号
秋田県	(株)秋田県分析化学センター	秋田市八橋字八幡191-42	018-932-4630	H14.4.18	秋田県第2号
秋田県	(公財)秋田県総合健康事業団環境検査センター	秋田市千秋区泉田6-6 1楼(平日9時～17時) 2楼(平日9時～17時)	018-831-2011 018-840-9200	H15.12.19	秋田県第3号
山形県	山形県衛生研究所	山形市十日町1-6-6	023-627-1371	H14.4.26	山形県第1号
山形県	日本環境科学(株)	山形市真木6番地	023-944-6900	H14.6.3	山形県第2号
山形県	(株)丹野	山形市松島町12-3	023-941-1141	H14.9.4	山形県第3号
山形県	(株)環境分析センター	郡山市道新町19-17	0235-24-4427	H10.5.25	山形県第4号
山形県	ネオストロンコンサルタント(株)	米沢市アルティイ1丁目200-17	0238-28-0026	H10.11.20	山形県第5号
福島県	(一社)福島県環境調査	福島市道徳町2丁目2番2号	024-949-2199	H14.4.3	福島県第1号
福島県	福島県衛生研究所	福島市方木田字水戸内16番6号	024-546-6664	H14.4.5	福島県第2号
福島県	(株)東洋分析センター 環境分析センター	郡山市若狭町一丁目104番地1	024-959-1771	H18.12.7	福島県第3号
福島県	(公財)福島県環境衛生協会	福島市方木田字水戸内19番地6	024-946-0091	H20.6.9	福島県第4号
福島県	福島県環境検査センター(株)	郡山市田村町新田字下町60番地1	024-941-1719	H20.10.30	福島県第5号
福島県	(株)日本化学環境センター	郡山市松島町2番25号	024-942-6676	H24.8.16	福島県第6号
茨城県	(一財)茨城県環境衛生検査センター	水戸市笠原町978-47	029-398-9068	H14.5.2	茨城県第1号
茨城県	茨城県衛生研究所	水戸市笠原町693番地2	029-241-6652	H10.4.25	茨城県第2号
茨城県	クワータ分析センター(株)	つくば市高崎台2丁目8-14	029-836-7011	H19.7.18	茨城県第3号
茨城県	(株)日立ハイテク・ソリューションズ	日立市野天町3-10-2	0294-65-7966	H25.2.20	茨城県第5号

所在地	登録分析機関名	所在地	連絡先	登録年月日	登録番号
栃木県	(一社)栃木県環境調査	宇都宮市緑区3-1-5	028-608-9677	H14.4.3	14栃木県第1号
栃木県	平成環境(株)	宇都宮市若井町2806-3	028-600-1700	H10.3.10	10栃木県第1号
栃木県	(株)旭研	宇都宮市小塚2-4-5	028-822-8012	H10.3.29	10栃木県第2号
栃木県	(株)栃木県環境検査協会	宇都宮市下郷町2146-13	028-673-9080	H20.6.25	20栃木県第1号
群馬県	群馬県衛生環境検査所	群馬市上井町378	027-232-4881	H14.4.16	群馬県第1号
群馬県	(一社)群馬県環境調査	群馬市西片町5-18-36	027-223-6365	H14.4.24	群馬県第2号
埼玉県	内閣府環境政策センター	さいたま市南区大字大田2051番地2	048-887-2590	H22.12.8	併作第666号
埼玉県	千葉県衛生研究所	千葉県中央区豊年町600-2	043-269-6723	H14.5.14	千葉県環境第1号
千葉県	(株)上野環境調査センター	千葉県津田沼区豊年16-2	0430-36-5001	H17.3.26	千葉県環境第2号
千葉県	(一財)千葉県環境調査センター	千葉県中央区中央通一丁目11番1号	043-246-2076	H10.12.5	千葉県環境第3号
千葉県	(株)日本分析センター	千葉県船橋市山王町290番地3	043-423-6325	H20.3.1	千葉県環境第4号
東京都	(公財)中央環境検査所	東京都品川区3-42-10	03-3907-0751	H14.4.4	14総務省第1号
東京都	(株)環境化学研究所	中野区中赤3-50-9	03-3367-3129	H19.10.18	14環境省第1号
東京都	環境保全(株)	八王子市大和田町二丁目4番14号	042-690-5979	H20.12.18	14環境省第2号
東京都	神奈川環境衛生研究所	小田原市入生田596	0469-23-2688	H14.4.1	14環境省第3号
東京都	(一財)北関東環境科学センター	地味郡市所原大字上目15番1号	042-776-9206	H14.8.30	併作第667号
東京都	(株)クワータ	横浜市青葉区高島二丁目11番地7	045-788-5101	H19.12.21	神奈川環境第3号
東京都	(株)クワータ	平塚市豊田町209番	0463-63-2222	H20.10.20	神奈川環境第4号
新潟県	新潟県環境化学研究所	新潟市西区宮川14-1	025-243-9419	H14.4.1	併作第668号
新潟県	(一社)環境化学研究所	三上市吉田1411番地甲	0256-34-7072	H14.6.12	併作第669号
新潟県	(一財)新潟県環境化学センター	新潟市江南区長又町63-1	025-284-6500	H14.7.22	併作第670号
新潟県	(一財)新潟県環境化学センター	長岡市新倉2-12-7	0259-46-7151	H14.10.10	併作第671号
新潟県	(一財)新潟県環境化学センター	上越市下門町166番地	025-543-7664	H15.3.1	併作第672号
富山県	富山県衛生研究所	富山市中太田山1711番地	0766-56-5506	H14.4.25	富山-01
富山県	(株)環境	富山市八日町247-17	076-629-3276	H15.1.13	富山-03
富山県	(株)安全性検査センター	富山市関人町2-62	076-631-6810	H13.3.7	富山-04
富山県	サオノノース(株)環境分析センター	富山市坂巻530	0766-25-6385	H17.5.6	富山-05
富山県	ダイヤモンドエンジニアリング(株)分析センター	津山市本町701	0769-24-2621	H18.3.26	富山-06
富山県	(株)環境	津波市千代24番地3	0763-39-2303	H19.1.23	富山-07
富山県	アースコン(株)	津波市戸野町17	0766-56-1180	H10.4.16	富山-08
富山県	石川環境科学センター	金沢市大塚町1-11	076-229-2011	H14.4.1	第1号
富山県	(一財)北陸環境化学研究所	金沢市本町3-1-2	076-226-2122	H14.4.1	第2号
富山県	(株)エネックス	金沢市高森町1-19-4	076-238-6666	H17.3.31	第3号
富山県	(株)北陸環境化学センター	金沢市御幸2-23-10	076-243-3191	H21.3.12	第4号
富山県	(株)北陸環境化学センター	越前市北野2-1-6	0778-21-0075	H17.3.3	第3号
富山県	(株)北陸環境化学センター	舟橋町豊栄4-4-27	0778-25-2771	H19.4.1	第4号
富山県	(株)北陸環境化学センター	伊波市富田町277-12	055-276-1600	H14.4.3	14山梨県第1号
山梨県	山梨県環境化学センター	甲府市富士町1-7-31	055-263-6721	H14.4.5	14山梨県第2号
山梨県	(株)マイキョー	甲府市湯沢7丁目38	055-228-2868	H16.12.14	14山梨県第3号
山梨県	(株)山梨県環境化学センター	甲府市国府町1丁目5-1	055-226-1830	H13.3.7	14山梨県第4号
長野県	長野県環境化学研究所	長野市大字東原町1978	026-227-0364	H14.4.1	長野県第1号
長野県	(一社)長野県環境化学センター	比佐市黒2-11-20	0263-32-0276	H14.4.1	長野県第2号

所在地	登録分析機関名	所在地	連絡先	登録年月日	登録番号
大分県	(一社)大分県商研会	大分市中央区原町1-3-8	06-8947-6481	H20.4.8	大分県7
大分県	株式会社環境センター	南市南区204-27	072-2981-0621	H20.8.28	大分県8
大分県	株式会社山化学工業研究所	大分市東区101-101	06-8322-0176	H21.4.14	大分県9
大分県	株式会社ケイ・エス分析センター	高田林市南町二丁目5番2号	0721-30-5511	H21.4.23	大分県10
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	大分市東区東区1-1-29	078-611-6940	H14.4.1	大分県11
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	大分市東区早野町1丁目1-31	078-735-2737	H20.2.1	大分県12
大分県	株式会社	大分市東区200番33号	0790-49-3220	H23.7.22	大分県13
大分県	株式会社環境研究所	大分市東区1007-9	0744-49-3744	H20.12.1	大分県14
大分県	株式会社	大分市東区大津3	0745-84-2822	H21.4.1	大分県15
大分県	株式会社	和歌山市山田町1-1-45	073-425-8570	H14.4.1	大分県16
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター19番地	073-427-1790	H24.7.6	大分県17
大分県	株式会社	大分市東区2丁目4番4	0697-23-4841	H14.3.22	大分県18
大分県	株式会社	大分市東区1-4-6	0692-24-0207	H14.11.5	大分県19
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター408-1	0695-246-8254	H14.3.20	大分県20
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター399-45	064-981-0181	H14.7.23	大分県21
大分県	和歌山市健康センター	大分市東区東区1-1	062-292-1514	H15.3.7	大分県22
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	063-924-3670	H14.4.1	大分県23
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	0636-32-0082	H19.9.7	大分県24
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	063-933-0018	H20.12.8	大分県25
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	069-055-1112	H16.10.27	大分県26
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	067-820-0400	H14.4.1	大分県27
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	067-834-5145	H19.7.18	大分県28
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	069-931-8757	H14.4.1	大分県29
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	069-821-4980	H14.5.1	大分県30
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	069-829-3595	H15.9.5	大分県31
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	062-662-0410	H14.4.7	大分県32
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	062-621-8948	H14.4.7	大分県33
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	062-671-8071	H16.6.2	大分県34
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	063-881-8282	H17.4.7	大分県35
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	062-504-1220	H17.11.1	大分県36
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	062-623-2211	H19.2.22	大分県37
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	0692-30-5009	H14.4.10	大分県38
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	0692-22-1651	H15.10.2	大分県39
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	0699-20-3232	H14.10.29	大分県40
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	0695-634-0250	H21.3.17	大分県41
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	069-286-1311	H16.10.15	大分県42
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	069-388-1222	H19.3.27	大分県43
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	0694-22-0131	H19.3.29	大分県44
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	069-366-9372	H24.7.2	大分県45
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	067-054-8980	H14.4.19	大分県46
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	067-544-4400	H14.4.19	大分県47
大分県	和歌山市健康センター	和歌山市健康センター	067-523-1181	H15.12.22	大分県48

所在地	登録分析機関名	所在地	連絡先	登録年月日	登録番号
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	大分市東区東区1-1-29	078-611-6940	H14.4.1	大分県11
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	大分市東区早野町1丁目1-31	078-735-2737	H20.2.1	大分県12
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	大分市東区200番33号	0790-49-3220	H23.7.22	大分県13
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	大分市東区1007-9	0744-49-3744	H20.12.1	大分県14
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	大分市東区大津3	0745-84-2822	H21.4.1	大分県15
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市山田町1-1-45	073-425-8570	H14.4.1	大分県16
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター19番地	073-427-1790	H24.7.6	大分県17
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	大分市東区2丁目4番4	0697-23-4841	H14.3.22	大分県18
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	大分市東区1-4-6	0692-24-0207	H14.11.5	大分県19
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター408-1	0695-246-8254	H14.3.20	大分県20
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター399-45	064-981-0181	H14.7.23	大分県21
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	大分市東区東区1-1	062-292-1514	H15.3.7	大分県22
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	063-924-3670	H14.4.1	大分県23
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	0636-32-0082	H19.9.7	大分県24
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	063-933-0018	H20.12.8	大分県25
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	069-055-1112	H16.10.27	大分県26
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	067-820-0400	H14.4.1	大分県27
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	067-834-5145	H19.7.18	大分県28
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	069-931-8757	H14.4.1	大分県29
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	069-821-4980	H14.5.1	大分県30
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	069-829-3595	H15.9.5	大分県31
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	062-662-0410	H14.4.7	大分県32
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	062-621-8948	H14.4.7	大分県33
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	062-671-8071	H16.6.2	大分県34
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	063-881-8282	H17.4.7	大分県35
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	062-504-1220	H17.11.1	大分県36
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	062-623-2211	H19.2.22	大分県37
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	0692-30-5009	H14.4.10	大分県38
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	0692-22-1651	H15.10.2	大分県39
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	0699-20-3232	H14.10.29	大分県40
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	0695-634-0250	H21.3.17	大分県41
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	069-286-1311	H16.10.15	大分県42
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	069-388-1222	H19.3.27	大分県43
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	0694-22-0131	H19.3.29	大分県44
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	069-366-9372	H24.7.2	大分県45
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	067-054-8980	H14.4.19	大分県46
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	067-544-4400	H14.4.19	大分県47
大分県	大分県立環境衛生科学研究所	和歌山市健康センター	067-523-1181	H15.12.22	大分県48

環境省ホームページより（平成25年7月12日現在）

http://www.env.go.jp/nature/onsen/contact/bunseki_list.pdf

所在地	養分分析機関名	所在地	連絡先	分析年月日	養分番号
165 大分県	出雲機器産業(株)	大分市花道松1丁目1番4号	097-505-8277	H19.2.2	大分県第10号
166 大分県	クニベ環境工学(株)	大分市霞峯南1丁目1番8-4号	097-548-9235	H25.8.19	大分県第9号
167 宮崎県	宮崎県衛生環境研究所	宮崎県宇都木高台西2-3-2	0985-54-1410	H14.4.18	1
168 鹿児島県	(公社)鹿児島県環境衛生センター	鹿児島市中央西2-8-15	099-263-8935	H14.4.1	鹿児島県第1号
169 鹿児島県	(一財)鹿児島県環境衛生センター	鹿児島市七ツ島1-1-5	099-262-0110	H14.4.1	鹿児島県第2号
170 鹿児島県	(株)鹿児島県環境衛生センター	鹿児島市谷山南2丁目2-11	099-201-4177	H17.4.22	鹿児島県第3号
171 鹿児島県	(株)鹿児島県環境衛生センター	鹿児島市小野2丁目15番2号	099-218-3311	H19.2.28	鹿児島県第4号
172 沖縄県	(財)沖縄県環境科学センター	那覇市宇越東2-20	048-975-1941	H18.11.18	沖縄県第1号
173 沖縄県	(株)沖縄県環境科学センター	那覇市宇越東2-20	048-975-8411	H20.3.24	沖縄県第2号
174 沖縄県	沖縄県衛生環境研究所	那覇市大原東2丁目2050番地	098-940-0781	H24.3.25	沖縄県第3号

合計 174 機関